

第16回

全国児童館・児童クラブ

ふくい大会



報告書

主催／福井県児童館連絡協議会、一般財団法人児童健全育成推進財団、全国児童厚生員研究協議会
共催／福井県、福井県教育委員会
主管／第16回全国児童館・児童クラブふくい大会実行委員会

◆目 次◆

大会概要	1
大会日程	2
オープニングパフォーマンス	3
開会式	4
基調講演	10
分科会	12
視察研修・あそびの屋台	34
交流会	36
閉会式	37
写真で振り返るふくい大会	42
実行委員・企画委員名簿	46

◆大会概要◆

- 【開催目的】** 全国の児童館・児童クラブ職員が児童健全育成事業を推進するために、自主的な研究協議と交流の場を設け、自らの意識と資質の向上を図る。
- また、児童館・児童クラブの多様性やその意義、職員の専門性について、地域社会へ認知が広がることを希求し、その普及・啓発のために現任従事者の積極的な企画・運営への参画を得ることを重視する。
- 【名 称】** 第16回全国児童館・児童クラブふくい大会
- 【テ ー マ】** つるつるいっぱい ふくいでハピネス
～ みんなでつなぐ 子どもの未来 ～
- 【期 日】** 平成30年11月10日（土）・11日（日）
- 【会 場】** 福井県生活学習館（ユウ・アイふくい）、福井県中小企業産業大学校
- 【参 加 者】** 児童館長、児童厚生員、放課後児童支援員、行政担当者、研究者等
- 【主 催】** 福井県児童館連絡協議会、一般財団法人児童健全育成推進財団
全国児童厚生員研究協議会
- 【共 催】** 福井県、福井県教育委員会
- 【主 管】** 第16回全国児童館・児童クラブふくい大会実行委員会
- 【後 援】** 厚生労働省、福井市、敦賀市、小浜市、大野市、勝山市、鯖江市、あわら市、越前市、坂井市、永平寺町、池田町、南越前町、越前町、美浜町、高浜町、おおい町、若狭町、社会福祉法人全国社会福祉協議会、児童厚生員養成課程連絡協議会、民間児童館ネットワーク、全国地域活動連絡協議会、公益財団法人福井観光コンベンションビューロー、社会福祉法人福井県社会福祉協議会、福井県みらい子育てネット母親クラブ連絡協議会、福井新聞社、FBC福井放送、福井テレビ、FM福井、福井ケーブルテレビ、さかいケーブルテレビ、丹南ケーブルテレビ、嶺南ケーブルネットワーク、ケーブルテレビ若狭小浜（順不同）

テーマについて

「つるつるいっぱい」とは、福井の方言で「あふれるほどいっぱい」という意味です。
幸福度日本一の福井でハピネスを感じてください。

◆大会日程◆

【1日目】 11月10日（土）		
12:00	受付開始	
13:00 ～ 13:40	全 体 会	オープニングパフォーマンス 【出演団体】 木部子ども三味線教室（坂井市） 八ツ杉太鼓 遊心（越前市） 勝山左義長ばやし保存会（勝山市）
13:40 ～ 14:00		開会式
14:00 ～ 15:00		基調講演 テー マ 「日本、そして福井の子育てあれこれ?!」 講 師 パクンマクン
15:15 ～ 17:15	分科会Ⅰ	
18:30	交流会受付開始	
19:00 ～ 21:00	交流会 会場：ザ・グランユアーズフクイ（ホテルフジタ福井 3階）	
【2日目】 11月11日（日）		
9:00	受付開始	
9:30 ～ 11:30	分科会Ⅱ	
11:45 ～ 12:30	閉会式	
12:50 ～ 17:30	視察研修	
13:30 ～ 15:30	あそびの屋台 会場：福井県児童科学館（エンゼルランドふくい）	

◆オープニングパフォーマンス◆

全国からの参加者を歓迎するため、福井の伝統芸能や児童館の子どもたちによる演奏を披露しました。

●出演団体プロフィール



木部子ども三味線教室（坂井市）

木部子ども三味線教室は、坂井市坂井町の全校児童89名の木部小学校校区にある坂井木部児童館で児童館活動のひとつとして続けている教室です。今年で12年目をむかえ、すっかり地元にも根付き、夏休みは毎週末イベントに出演しているほか、毎年3月にエンゼルランドふくいで開催される「児童館フェスタ」にも出演しています。児童館に来館する児童たちが教えあい、運営していくことを目標に日々の練習に励んでいます。



八ツ杉太鼓 遊心（越前市）

1989年、越前市（旧今立町）で活動する八ツ杉権現太鼓を継承したいという思いから結成しました。太鼓の面白さ、楽しさを感じながら、日々成長するとともに、太鼓を通じて「感動と元気」を与える演奏ができるよう日々練習に励んでいます。



勝山左義長ばやし保存会（勝山市）

2月の最終土日に行われる「勝山左義長（かつやまさぎちょう）」は300年以上の歴史があり、福井県の無形民俗文化財に指定されています。勝山左義長ばやしの「浮き太鼓」は、楽しい唄に合わせて面白おかしく自由に太鼓を打つことが特徴です。また、太鼓に人が座ることや、長じゅばんを着ることなどは、全国のまつりや太鼓の中でもとても珍しい郷土に育まれた伝統芸能です。

◆開会式◆

開 会 宣 言



第 16 回全国児童館・児童クラブふくい大会実行委員会
委員長 欠 戸 郁 子

皆様こんにちは。

本日は、北海道から沖縄まで全国からたくさんの方々に福井へおいでいただきまして、誠にありがとうございます。

また、ご来賓の皆様方には、ご多忙の中、ご臨席を賜りまして、厚くお礼申し上げます。

幸福度日本一の福井県でこの大会を開催できることを大変光栄に思っております。

今日と明日の2日間、様々な研究討議がなされるこの大会が、大会テーマのサブテーマにございますように、つるつるいっぱいのハピネスを、次代を担う子どもたちの未来につなぐ第一歩となることを祈念しております。

それでは、ただ今から「第 16 回全国児童館・児童クラブふくい大会」の開会を宣言いたします。



◆開会式◆

主催者挨拶



一般財団法人児童健全育成推進財団

理事長 鈴木 一 光

子どもたちのパフォーマンスすごいですね。あの伝統が間違いなく引き継がれて、文化が継承されていくということを、目の当たりにしたような興奮に襲われています。

舞台上の子どもたちの姿が、私達、児童館・児童クラブの職員のエビデンスであり成果でしょう。

その子どもたちに背を押されてふくい大会を始めたいと思います。

思えば、平成7年に第1回の大会を開いた時から、児童福祉をミッションと感じている者たちが集まって、児童厚生員の矜持、誇りをもち続けようというのが、主旨の大会でございます。もとより予算はありませんし、他からの補助をいただくことも潔しとせず手弁当でやって参りました。ですから、2年に1回、その代わり組合運動とか、営利団体と間違われぬ為に、厚生労働省を始め、開催都道府県の方々、それから地方自治体の方々、公の団体、組織の後援をたくさん頂くことを心掛けて参りました。

重ねまして16回目のふくい大会でございます。10月1日に厚生労働省の多大な尽力があって、改正児童館ガイドラインが発出施行されました。これは、幸せを発信する幸福度日本一のふくい大会に相応しい時だというふうに考えております。なぜならば、児童福祉法の主旨は、子どもたちを幸せにすることにあります。最善の利益と最大の発達を保障する児童福祉法を受けまして、改正児童館ガイドラインは、子どもの気持ちで作りに上げてきたと聞いております。

特に、総則第1章の一行一行には魂がこもっております。我々がどう子どもを見たらいいかという基本的視点、児童館におけるあそびの意味、そして児童館という施設が健全育成の拠点であるという拠点性、公序良俗に反しない限り何をやってもいいという多機能性、そして、地域全部を子どもが安心して遊べ暮らせる場所にするという児童館の持てる地域性、これらが織り込まれておりますので、この2日間、この総則を折に触れて、読み込んで、体得して、福井から実践の第一歩を進めていただきたいと思えます。

結びに、この大会を開くに当たりましては、厚生労働大臣からご祝辞をいただき、厚生労働省子育て支援課の田村課長にもご臨席を賜っております。福井県からは、西川知事をはじめ、山本県議会議員、東村福井市長にもご臨席を賜りました。これは何よりも望外の喜びであります。さらに、児童厚生員の運営委員の方々、それから福井県の児童館・児童クラブの先生方にはこの会を目指して、多大なるご尽力をいただいております。

その他県内の多くの方々のご協力を得て、今日のこの日を迎えることが出来たことに、また、北海道から沖縄まで集まってくださった皆様に感謝をして、開会にあたっての挨拶とさせていただきます。

◆開会式◆

来賓挨拶

厚生労働大臣 根本 匠 様
(代読:厚生労働省子ども家庭局子育て支援課課長 田村 悟 様)

第16回全国児童館・児童クラブふくい大会の開催に当たり、一言お祝いを申し上げます。

本大会が、16回目を迎えられたことに心からお慶び申し上げますとともに、開催に当たり、関係者の皆様のご尽力に対し、厚くお礼申し上げます。

また、日頃から、児童の健全育成や子育ての支援に携わる関係者の皆様に、心から敬意を表します。

厚生労働省では、児童が健全に育成されるよう児童福祉の推進に日々取り組んでおります。

本年10月には、7年ぶりに児童館ガイドラインを改正しました。ひとり親家庭や児童虐待などの昨今の子どもをめぐる福祉的な課題への対応や、異年齢児の交流など子育て支援に対する児童館の機能の強化について、全国の自治体に周知を行いました。

また、放課後児童クラブの関係では、本年9月に「新・放課後子ども総合プラン」を厚生労働省と文部科学省の連携のもと策定いたしました。本プランでは、放課後児童クラブの待機児童を解消することを目指し、2021年度末までに約25万人分を整備し、来年からの5年間で約30万人分を整備することとしております。量的整備に加え、放課後児童クラブが児童の自主性、社会性を育む場であるという役割も改めて明示しました。

今後とも、こうした施策をしっかりと進めることにより、児童館や放課後児童クラブがより発展し、ひいては、地域の多くの方々のご協力のもとに、子どもたちが健やかに育つことができますよう期待しております。

結びに、本大会が実り多い大会となりますよう祈念するとともに、本日ご参集の皆様の益々のご活躍をご期待申し上げ、お祝いのご挨拶といたします。

◆開会式◆

来賓挨拶



福井県知事 西川 一 誠 様

皆さん、こんにちは。

第16回の全国児童館・児童クラブふくい大会が開催されるに当たり、一言ご挨拶申し上げます。

全国各地から福井県にお越しをいただき、まずもって心から歓迎を申し上げます。皆様には日頃からそれぞれの地域で児童の健全育成にご尽力いただいておりますことに深い感謝と敬意を表すものであります。

また、福井県では、先月、50年ぶりに2回目の国民体育大会と障害者スポーツ大会が開かれたところでございます。障害者と健常者の融合にも成功し、天皇杯、皇后杯を獲得できたところでございまして、皆様に厚くお礼を申し上げます。

さて、福井県は色々な生活水準の調査において、幸福度日本一の評価をいただいております。また、慶応大学が行っておられる子どもの幸福という調査においても日本一であります。

それから、学力と体力、文部科学省が毎年調査をしておりますが、これも学力と体力ともに日本一という県でございまして、福井にお見えになった皆様の目にどのように見えるか、難しいところではありますが、是非どこに見えるか、関心をもって見ていただければと思っております。

福井県では3人っ子応援プロジェクトなど、さまざまな独自の政策を重視し、地域の繋がりや3世代同居・近居といった力で子育ての環境作りを進めております。

児童館・児童クラブにつきましても、いろいろなあそびや体験学習が出来る環境を作ると共に、地域の子育て支援の拠点として機能が発揮できるよう引き続き児童館活動を支援して参りたいと思っております。

明日の研修先でございますエンゼルランドふくい「福井県児童科学館」であります。これは初代の宇宙飛行士で、日本科学未来館の館長でもいらっしゃいます毛利衛さんに名誉館長をしていただいております。施設は一昨年リニューアルいたしまして、日本科学未来館と同じ宇宙の映像がほぼ同時点で見られるようになっております。また、先ほど勝山左義長という大変愉快なお祭りが紹介されたかと思っております。その勝山にある「恐竜博物館」もご視察いただくとお思います。これは、世界の三大恐竜博物館の1つでありまして、地方ではあります。年間100万人近い来館がございまして、フクイティタン、フクイラブトル、フクイベナートルなど恐竜がたくさんいますのでご覧いただきたいと思っております。さらに、福井県はコシヒカリの発祥の地であります。今年50年ぶりにコシヒカリの後継のお米として「いちほまれ」という日本一誉れ高いお米を開発しました。是非、福井のおそばと同様、また、越前がにと同様この「いちほまれ」も召し上がっていただければと思っております。

結びになりますが、今回の大会のご成功と本日お集まりの皆様の一層のお元気とお幸せを心からご祈念申し上げます。歓迎のご挨拶とさせていただきます。ようこそ福井にお見えいただきました。

◆開会式◆

来賓挨拶



福井県議会議長 山本文雄様

本日、第16回全国児童館・児童クラブふくい大会が、このように会場いっぱい皆様方がお集まりになりまして開催されますことを心よりお祝いを申し上げたいと思います。また、全国から遠路お越しいただきました皆様方に心から歓迎を申し上げたいと思います。

皆様方には日頃から児童館および放課後児童クラブ活動を通じまして、地域児童の健全育成に多大なご尽力を賜り、心からお礼を申し上げたいと存じます。

さて、我が国では、本格的な少子高齢化・人口減少時代を迎えまして核家族化や情報化、そしてライフスタイルの多様化など児童を取り巻く地域や家庭のあり方が大きく変化をいたしており、児童の福祉的課題も複雑・多様化をいたしておるのが現状でございます。これからの日本を担う子どもたちが、夢や希望、豊かな心を持ち健やかに成長することは国民全ての切なる願いでございます。われわれ大人に課せられた責務でもあり、児童の健全育成に携わっておられる皆様方の果たす役割は益々大きくなっていくと思うものでございます。

こうした中、本日関係各位が一堂に会されまして、「つるつるいっぱい ふくいでハピネス～みんなでつなぐ 子どもの未来～」をテーマに研鑽を深められますことは誠に意義深く、この大会を契機といたしまして、児童館・放課後児童クラブの活性化が一層図られるものと、大いに期待をいたしているものでございます。

私ども県議会といたしましても、児童の健全育成に、皆様方と一緒に全力を挙げて取り組んで参りたいと思っておりますので、一層のお力添えをお願い申し上げます。

結びになりますが、児童館連絡協議会をはじめ関係団体の今後ますますのご発展、本日もご参会の皆様方のご健勝とご多幸を祈念いたしましてお祝いの言葉とさせていただきます。本日は誠に御座ります。どうぞよろしくお願いいたします。

◆開会式◆

来賓挨拶



福井市長 東村 新一 様
(代読：福井市教育長 吉川 雄二 様)

第16回全国児童館・児童クラブふくい大会の開催に当たり、開催地を代表いたしまして、一言ご挨拶を申し上げます。本日は、全国から多くの皆様が福井市にお越しいただき、誠にありがとうございます。心から歓迎をいたします。

また、全国の児童館、児童クラブの関係者の皆様が一同に会し、本日の基調講演、分科会など、2日間にわたって盛大に開催されますことを心からお慶び申し上げます。皆様方におかれましては、日頃から、児童の福祉の向上に積極的に取り組まれており、その並々ならぬご努力に対し深く敬意を表します。

さて、児童を取り巻く地域や家庭のあり方が多様化し、共働き世帯の増加や、ひとり親世帯の増加、地域のコミュニティ力の低下などにより、児童を社会全体で育てていくことが求められてきている中、今後も児童健全育成活動の拡充が大きく期待をされているところでございます。本市では、共働き率が高いことから、仕事と子育てを安心して両立出来るよう、保育、教育環境の充実に力を注いでおり、児童館や学校の余裕教室等を利用して、78箇所放課後児童クラブを運営をしています。今後も子どもの健やかな成長を支援すると共に、子育て世帯だけでなく、高齢者、障害者も地域で支え合い、誰もが安心して暮らせる街づくりを進めて参りたいと考えております。

せっかくの機会でございますので、本市の紹介をさせていただきます。福井市は豊かな自然と美味しい食べ物に恵まれ、毎年住み良さにおいて全国的に高い評価を頂いております。

中世の貴重な史跡である朝倉氏遺跡や、幕末の歌人橘曙覧の記念文学館、福井藩主松平氏の別邸養浩館庭園、福井藩の外国人講師であったグリフィスの記念館等、皆様には是非訪れていただきたい名所や史跡が沢山ございます。この機会に是非ともお立ち寄りいただき、福井市の文化や食の魅力にも触れていただければ幸いです。

結びになりますが、全国児童館・児童クラブ大会の益々のご発展ならびに本日お集まりの皆様のご健勝とご多幸を祈念申し上げ、お祝いの挨拶とさせていただきます。

◆ 基調講演 ◆

日本、そして福井の子育てあれこれ？！

- 日 時 11月10日(土) 14:00~15:00
- 場 所 福井県生活学習館 多目的ホール
- 講 師 パックンマックン
- プロフィール 1997年に共通の知人の紹介で知り合い、パックンマックンを結成。日米文化をネタとしたお笑いで人気を博し、情報番組、英語にまつわるコーナーなど、テレビ・ラジオで活躍。ラスベガスやハリウッドで英語漫才に挑戦し成功を収めた「国際派お笑いコンビ」



パトリック ハーラン (パックン) 写真右

出身地 アメリカ コロラド州
生年月日 1970年11月14日(48歳)
就 任 福井ブランド大使
東京工業大学非常勤講師

吉田 眞 (マックン) 写真左

出身地 群馬県
生年月日 1973年3月26日(45歳)
就 任 ぐんま観光特使
富岡ふるさと大使

● 概 要

福井ブランド大使としても活動中の、国際派お笑いコンビのパックンマックンをお招きし、「日本、そして福井の子育てあれこれ?!」と題して、幸福度No.1の福井県と全国、世界との子育て、環境、文化の違いなどを、軽快なトークと笑いで講演が行われました。

冒頭、本講演の要点である「コミュニケーションの楽しさ」を参加者全員に感じ取ってもらうため、ペアによる自己紹介が行われました。はじめての人との握手と会話で会場内は和やかな雰囲気になり、一気に熱気と興奮に包まれました。そして「コミュニケーションは楽しいことを、親あるいは会場の皆さんのような教育者は自らの行動で示して、子どもたちに伝えることが大切」と訴えました。

パックンは坂井市にある福井県児童科学館「エンゼルランドふくい」で、自分の子どもたちと一緒に遊んだこと、マックンは「福井は僕の出身群馬と同じく自然が多く身近で、自然から学ぶことが多い。」とか、「子どもが児童クラブに通っていて、児童館や児童クラブでの創作ワークショップやあそびに積極的に参加させていました。この体験が子どもを大きく成長させてくれました。」と語っていました。

また、子育て、子どもの教育、さらに将来の進路や仕事を決める時など、日米の文化や考え方にどうしても違いがあり、そこで最も大切なことは子どもを含めた家族の話合いの場「家族会議」を持つこと、「家族会議」で子どもにできるだけ選択肢を多く示して物事を決めること、そのカギになるのが「コミュニケーション」であることを強調しました。

講演は冒頭を除き、パワーポイントの映像により日米の違いが説明され、最後にマックンがラスベガスやハリウッドでパックンと組んで英語漫才をやる夢をかなえるため、かつて英会話の猛勉強をしたことが紹介され、レストランを舞台にした英語漫才が披露され、講演を終えました。

● 講演の様子



バックン (右) と
マックン (左)



ジャンケンゲーム



参加者全員の自己紹介



バックンマックンも参加者とお互いに自己紹介

第1分科会

子どもたちの放課後の世界を広げよう！

～児童館と児童クラブの連携を通して～

概要

各児童館・児童クラブにおける交流連携事業の取組みの現状について話し合い、交流の成功や困難の要因を探りました。そして最後にみんなで「おすすめ交流モデルプログラム」を作成しました。

講師

佐藤 晃子さん

(厚生労働省子ども家庭局子育て支援課健全育成推進室
児童健全育成専門官)

野澤 秀之さん

(一般財団法人 児童健全育成推進財団 第三者評価室長)



佐藤 晃子さん



野澤 秀之さん

分科会内容

【1日目】

1. 行政説明

「児童館及び放課後児童クラブの現状」

厚生労働省子ども家庭局子育て支援課

佐藤晃子さん

- ・児童館ガイドラインと放課後児童クラブ運営指針には、「連携」の考え方がそれぞれ示されていますので、十分に目を通した上で連携を進めてほしいです。

2. 実践発表

- (1) 児童館と地域児童クラブとの連携「3館合同運動会」(福井市和田児童クラブ)
- (2) 児童館同士の連携「夏休みの交流会」「秋の合同遠足」(福井市すずらん児童館)
- (3) 児童館内の一般児童と放課後児童の関わり「子どものための防災訓練」「高校生によるサッカー教室」(福井市ひまわり児童館)、「地域とつながっちゃオ作戦」(福井市くるみ児童館)、「トーンチャイムでつながろう」(福井市もみじ児童館)

3. グループ協議

- (1) アイスブレイク
「積み木しりとり自己紹介」
- (2) 交流連携事業で、やっていること・困っていることを出し合い、交流連携事業の成功の要因を探りました。
 - ・近隣の児童クラブと合同ミニ運動会を行っています。
 - ・読み聞かせや折り紙指導などで地域の人と交流を持っています。
 - ・地域のイベント参加や、老人施設の訪問などを行っています。

- ・大型児童館では職員同士の交流のみ行っています。
- ・支援が必要な子が通っている児童クラブとの交流も望んでいるが時間の取り方が難しいのが現状。野菜を一緒に育てるなどの交流が考えられます。
- ・各県によって開館時間や運営体系が違ってきます。中高校生が来館する館があるのが良いです。
- ・児童館の位置が違うので移動が困難なことで、館によってルールが違うことが交流の難しさを引き起こしています。



【2日目】

1. グループ協議

- (1) やってみたい交流事業を挙げました(ブレインストーミング)。
- (2) 「おすすめモデルプログラム」の作成
 - ①「ごちゃまぜまつり」子どもが考え参画するコーナー、民生委員、母親クラブのブースもあります。
 - ②「児童館、児童クラブだけじゃない全国大会」地域の方、異業種の方にも呼びかけ、子どものために働いている姿を見てもらいます。
 - ③「ものづくり交流」中学校区内の館やクラブと一緒に何か作ります(例：カレー作りのためのじゃがいも栽培)。
 - ④「全国こどもサミット」子どもたちが活動報告をして、一緒にハピネスダンス(福井国体のためのダンス)を踊ります。
 - ⑤「今日は中・高生」中学生や高校生と一緒に

登校し学校探検し一緒にお弁当を食べます。

⑥「あそびにいこさ」児童館・児童クラブフェスタ。児童館とクラブの定期打ち合わせの会を設け、一年間かけて事業計画を話し合います。

⑦「昔の子どもたちも集まれ！」地域のお年寄りにぶらっと児童館に立ち寄ってもらい、お茶飲み、おしゃべり、将棋を指したりして、子どもたちの様子を見てもらいます。

⑧「今は自然だぁー」山に行つてのこぎりを使ったり、木の実を集めたり、穴を掘ったりします。

2. 講評

佐藤さん：いろいろな発想が出されて面白く聞いていました。地域の環境や施設設備、勤務体系などが異なる中で、できることから始められるといいと思います。また、「連携」や「交流」というイベント主体になりがちですが、日々の中で活動を大切にする、子どもを主体に、子どもがやりたいことを大人と一緒にしていくという視点を忘れないでください。今日この会で話し合ったことは、職場に持ち帰って共有していただくとともに、職場の中で改正された児童館ガイドラインと一緒に読んでほしいと思います。

野澤さん：確実にできそうなものや前衛的なアイデアもあり、興味深かったです。各館の状況も条件も違うけれどアイデアを出してみよう、夢を語り合おうというのは、バックキャスト思考です。思いっきりアイデアをとばして、そこに行くにはどうしたらよいかを考えた方がうまくいくものです。各グループの司会者の方の話の引き出し方がとてもよかったです。現場で子どもたちに対する接し方と同じだと思えます。最後に2つのことを心に留めておいてください。①皆さんの地域で子ども達のために本音で語り合えるコミュニティを持ってください。②児童館の方もクラブの方も児童館ガイドラインを読み込んでください。子どもに関わりのある地域の方にも知ってほしいです。最後にワークショップを一つ。現場に戻って

何をするか
Baby stepを
各グループで
宣言してくだ
さい。



参加者数

1日目45名／2日目32名

参加者の声

- ・全国の仲間からたくさんの方を教えてくださいました。澆刺として積極的に意見を言われる姿に私も子どものためにがんばらなくてはと強く感じました。
- ・いろいろな考え方をまとめていくことの重要性和難しさ、それを達成した時の充実感を感じることでできる分科会でした。
- ・今までやってきた交流事業を見直していく必要性を強く感じました。子どもの自主性は毎日の暮らしの中で育つと再認識しました。

担当者の声

会場が狭いうえに、1日目は十分に話し合っただけ時間がとれず申し訳ない思いがありました。2日目の「おすすめモデルプログラム作り」では、前日の意見交換を活かして、各班ともすばらしいアイデアを楽しんで出し合っている様子が見られたことは、分科会担当としてこの上ない喜びでした。参加者全員が熱心に意見を発表し、よりよい大会にしようという強い気持ちが伝わってきて感動しました。企画委員としてお手伝いできたこと、全国の方々の視点の違いを知ることができたこと、目的は子どものためという共通認識が一致していることがわかったことがとてもよかったです。

企画委員

齋藤 常夫 (福井市もくせい児童館)
長谷川 和子 (福井市さつきじどうかん)
小林 清直 (福井市とちのき児童館)
筆島 幸枝 (福井市とまと児童館)
八杉 藤志美 (福井市くすのき児童館)
吉岡 眞代 (福井市あさがお児童館)
渡邊 敦子 (福井市くるみ児童館)
中村 浩美 (福井市和田児童クラブ)
南 智仁 (福井市社児童クラブ)
田村 祐紀恵 (福井市社会福祉協議会)



第2分科会

職員の関わりを振り返る！

～マルトリートメントの視点を頼りに～

概要

「マルトリートメント」（不適切な関わり）の言葉をキーワードに、身近な事例を通して「より良い関わりとは何か」を考えていきました。職員の創造力や勇気が、子どもだけでなく親御さんも救うことになるということに気づかされました。

講師

榊原 信子さん

(福井大学医学部附属病院子どものこころ診療部 臨床心理士)



榊原 信子さん

分科会内容

【1日目】

1. 講師講演

子育ての実態として、知らず知らずに「マル＝不適切」「トリートメント＝関わり方」をしている親が増えているということがあります。親自身がほめられたことがなく、ほめ方がわからないので叱責したり、無視したりということになるからです。これでは、親も子ども自己肯定感が育ちません。しかも、子どものデリケートな脳は極度のストレスを感じると、その苦しきから逃れようと脳が自ら変形してしまう！ということがわかってきました。強い体罰はもちろん心理的マルトリートメントやネグレクトでも、脳にダメージがあります。意外なのは、身体的暴力よりも怒声や暴言の方が、より子どもの脳に深刻な影響を与えることです。このことを重く受け止めるべきです。子どもに寄り添うとは、ほめられてないかもと想像・関わり方のモデルを見せる・少しでも出来たらほめることで自己肯定感を育むことです。また、子どもの気かりな様子の背景には親があり、その親に寄り添うことも大事です。寄り添うとは、まず

この親があまり認められることがなく自己肯定感が育っていないのではないかなど想像を働かせることです。



2. グループディスカッション

事例をスタッフが福井弁で再現

(1)事例1（遊びを次々と変え、いつも注意を受けている子と職員のやりとり）

不適切な個所の指摘をすることで、どんなことが問題になるか話し合いました。この事例の場合は兄弟と比べることで、人格否定や自分ばかりという言葉から不平等感を持っていることなどが想像できました。そのうえで、職員としてはどのようにしていくとよいかを話し合いました。



(2)事例2（思春期に向かい自我の芽生えがある子どもと親・職員のやりとり）

身体の不調を訴える子どもの心にどこまで寄り添えるかということと、頑張らせようとする親の言動に何があるかを想像してみました。親自身が認められたい欲求があることを想像できると、まず親の頑張りをほめて認めることで、子どものしんどさに気づかせるきっかけになります。

3. 講師まとめ（1日目）

親自身が不適切に育てられていて、経験不足だとマルトリートメントになりがちです。そのことを理解していない親が多いです。我々は、相手の辛さに気づくのが大事で、今できていることを一

緒に見つけてたくさんほめて、良き相談者になれるとよいです。相手には、やり方がわからないだけで、あなたのことやあなたのせいじゃないことを伝え、具体的な対応を一緒に考えて、できた結果を一緒に共有できると自己肯定感を育むチャンスになります。



【2日目】

1. 講師講演（1日目の振り返り）

最近の特徴として、スマホ・タブレット・スマホ育児があります。コミュニケーションツールとして利用するのならまだしも、結果的に保護者の怠慢や養育放棄につながることもあるので要注意です。自己肯定感の基礎には、愛着（アタッチメント）が大事です。この愛着が不足した子どもは脳活動が活発ではありません。このような子どもはよりいっそうほめることが必要です。ほめるには準備がいります。事前ルールがあるか？状況にきづいているか？やり方がわかるか？など行動に注目するとよいです。ほめるポイントとしては、ほめる・無視・罰を使い分けること。子どもの気持ち・行動を言語化してみる。量や時間を具体的にすること。役割を与えることなどがあります。昨今、ルールが曖昧な家庭が増えていると感じられます。自己管理は難しいですが、交渉する力を育てるチャンスでもあります。

2. グループディスカッション

(1)事例3（友だちのちょっかいにキレてやつあたりで自分のものを壊した子と親・職員のやりとり）

親の困り感を受け止めきれないことで、良き相談相手になっていないことが問題です。



「どうしたらいいんでしょうね？」のような言葉は、困り感を引き出すチャンスです。

(2)事例4（明らかなマルトリートメントな会話をする親子のやりとり）

親自身にマルトリートメントの自覚が必要ですが、やはり親の悩みを共有して一緒に考えたり、

子どもの良いところを伝えたり、良いモデルを見せることで気づきのチャンスをつくります。

3. 講師まとめ（2日目）

児童館ができることとしては、想像力を働かせ、子・親・家族の気持ちの理解を深め、少しの勇気でもう一歩を踏み込んで安心感・安全感を与える場所になるよう努めることです。日頃から、仲間の職員をほめ、自分自身をほめて、職務を遂行して欲しいです。

参加者数

1日目49名／2日目48名

参加者の声

- ・全国の児童館の皆さんの意識の高さを感じられました。子ども・親御さんそれぞれに対する対応の仕方がなるほどと納得させられる話や意見がたくさん聞いて有意義でした。
- ・マルトリートメントが何かを知ることができました。もっと知識を深めたいと思いました。
- ・他県の方々と意見交換ができ、保護者対応のいろいろな経験談を聞いて楽しかったです。
- ・どの県の方々も専門職としての誇りを持って、子どもにも、親御さんにも、真摯に向き合っておられる姿勢に感動をおぼえました。
- ・日々悩んでいるのは自分たちだけじゃないとわかって、勇気と元気をもらった気がします。

担当者感想

子どもの脳に影響が出る！マルトリートメント。これは、ただならぬことだという思いから掲げたテーマでした。この知識を少しでも多くの方に拡散できたのなら幸いです。本分科会の担当スタッフは、大会運営など初めて経験するものばかりで、いたらないことが多くありましたが、全国から来られた皆さんの温かいまなざしと、子どもたち・親御さんたちを支えたいという気持ちは同じだという熱い思いに助けられ、2日間を無事終えることができました。参加してくださった皆さんに心から感謝します。

企画委員

武川 ひろみ（坂井市坂井木部児童館）
下田 美穂子（坂井市池上児童館）
桑野 佳世（坂井市春江児童館）
中嶋 智恵（坂井市兵庫児童館）
川畑 久美子（坂井市城北児童館）
出店 理成（坂井市子育て支援課）

第3分科会

五感に響け！

～パコーンの魅力まるごと体験～

概要

「パコーン」とは五感で楽しむ紙管を使った打楽器です。誰でも簡単に作れます。地域の資源を活用した子どもたちの豊かな感性を育てる体験活動の一つとして、一緒にパコーンの可能性を探りました。

講師

山内 廣志さん

(有限会社プランニングヤマコウ代表)



山内 廣志さん

分科会内容

1. グループ分け

受付で各自くじを引き8つのグループに分かれ(1グループ4名～5名)、他県の児童厚生員、参加者と交流を行い制作に入りました。

2. 講師からパコーンの説明

- ・パコーンは紙管でできています(叩く部分は木)。
- ・幼児からお年寄りの方まで誰でも簡単に叩ける打楽器です。



3. パコーン作り開始(教室中央で実演)

(1)和紙(20cm×20cm)に墨(筆の代わりにダンボール片を使う)で一文字書きました。

*今回は名前が一番最初の文字をそれぞれが工夫しながら書きました。

(好きな文字を書いてもOK)

(2)講師が各グループを回り、スプレーで水をかけて文字を滲ませる、朱色の墨を垂らす等を行いました。

(何もしない場合もあります。)

(3)和紙をアイロンで乾かしました。

(アイロンをかける前に墨で濡れている和紙をキッチンペーパーを使って押さえておきます。)



(4)和紙の裏面に糊を刷毛で塗りパコーンに貼りました。

(貼り方は自由です。)



(5)貼った和紙に空気が入った場合や和紙が上下にはみ出た場合は空気を抜いたり、上下にはみ出した部分を切ったり、ダーツを作って折り返したりする等して修正を行いました。

(6)ドライヤーで和紙の部分が真っ白になるまで

しっかり乾かしました。

*制作中、電圧の使用が上限を超えブレーカーが落ちるといふハプニングもありましたが、児童厚生員（参加者）の素速い対応でのりきりました。

(7)和紙を貼った時に、はみ出した糊をウェットティッシュで綺麗に拭き取りました。



(8)最後に各自、自由にパステル・ラメ・ネイル等で装飾しました。世界に一つしかない自分だけのオリジナルの打楽器ができあがりました。

4. みんなで叩いてみましょう

- ・講師の指導の下、パコーンを叩き音を確認しました。
- ・参加者全員で手の感触を感じながら簡単な音遊びをしました。
- ・「どんぐりころころ」を歌いながら、歌に合わせてパコーンを叩き、参加者の心を一つにすることができました。最後はパコーンで拍手して終わりました。

参加者数

1日目37名／2日目28名

参加者の声

- ・「失敗はない」という制作だったため、安心して取り組めたし、子どもたちにも作る楽しさ、楽器としても楽しめることを伝えたいです。
- ・段ボールを使って文字を書くのがとても斬新でアートだなあと感じました。
- ・すごく楽しかったです。児童館で子どもたちと一緒に作ってみると楽しいと思います。絵を描いたり色を塗ったりと手の作業をさせるのは楽しめると思います。
- ・気取らず考え過ぎず思いのまま作れたので気持ち

良くできてとても楽しかったです。歌に合わせて叩けたのも良かったです。

・演奏の部分をもっと少し行って欲しかったです。

担当者感想

全国大会の分科会を担当することになり、担当職員で何度も話し合いを重ねました。制作過程の変更などもありましたが大きなトラブルもなくスムーズに和気あいあいとパコーンの制作ができたように思います。色々な工夫も見られオリジナルパコーンが65個も出来ました。全国の児童館・児童クラブの活動で利用していただけたら嬉しく思います。



企画委員

幅岸	清美	(大野市児童館)
江端	亜由美	(大野市西部児童センター)
今井	智子	(")
大川	貴美代	(大野市南部児童センター)
泉脇	真由子	(大野市東部児童センター)
宝居	貴子	(")
高村	重美	(大野市北部児童センター)
松田	美保	(大野市和泉児童センター)

※1日完結型として1日目、2日目ともに同じ内容で開催しました。

第4分科会

現代の子どもとの関わり方
～私たちにできる声かけ～

概要

子どもに関わる専門職として、自らの言動を振り返り、子どもたちの視点に立ってできる声かけやコミュニケーションの取り方を見つけ、子どものことや自分自身のことをもっと知り、自分に必要なことは何かを、グループワークや講師の助言を通して学びました。

講師

吉弘 淳一さん

(福井県立大学看護福祉学部社会福祉学科 准教授)



吉弘 淳一さん

分科会内容

1. グループワーク

意見交換したいテーマについて、参加者が事例などを持ち寄り、問題点や対応例、声かけなどについて意見交換を行いました。

- ・暴言・暴力の気になる子について×3グループ
- ・甘える子について×1グループ
- ・話を聞けない子、じっとしてられない子について×2グループ
- ・ルールを守れない子について×2グループ



2. 講義

【私たちにできる声かけ

-ネガティブからポジティブへ-

(1)子どもの話を上手に聞くための4つの視点

(専門職としての自分を明確に。⇔ 親の目線)

- ①子どもの発達を理解しながら、それに合った関わり方等を考える。
- ②子どもの自己肯定感が高くなれば、やる気・意欲も高くなる。
子どもの周囲にいる人は声かけや関わり方を工夫する。
- ③子どもの考える力が育つと、我慢する力が育



まれると同時に、個々の目標に向かう選択肢が増え、可能性が高くなる。

- ④親の性格の把握、生き様を自己一致させながらストレスマネジメントを行う。

※子どもの話を聞いてあげる心の余裕と許容量を広げる。

(2)より良い人と人とのつながりのポイント

- ①親の過干渉、過保護の意味…子どもに失敗をさせないよう先回りをしない。
- ②環境を変えると、今の状況も変わる…基本は、相手に余裕を持たせて今をプラスに変化させながらモチベーションを上げていく。
親の価値観：～しないといけない。

→ するに越したことはない。

カラーセラピー：家の中の配色位置を変えてみる。

- ③どのように子どもが悩むのかを観て、聞いてみる。

・先手を打ちすぎない（子どもができそうなことは、待って見守る。）。

・小学校2年までは質問があったら答え、小学校3年生からは質問に答えない。

- ④できないことをさせるより、できることを更に伸ばす。

- ⑤一緒に～をする。

…せざるを得なくなる。

- ⑥アイメッセージで伝える。



…「～してくれたら嬉しいなあ」に変える。

- ⑦寝めると叱ることの、発達における2つの視点をもつ。

幼児期：「いい子だね」「偉いね」「すごいね」
「よくできたね」

児童期以降：結果ではなく、過程と子どもの努力、足跡を言葉でほめる。

- ⑧子どもが今やっていることを、親の価値観でやめさせたいときの方法

…子どもに、何らかの余裕を持たせて、子ども自身が納得してやめることが大切。無理にやめさせると負の強化で関係が悪化する。

- ⑨達成感の30分以内に、しっかりと自己肯定感を親が育む。

- ⑩子どもの言動の意味を、子どもに伝えることが大切

- ⑪やめたい発言には、「何で?」「どうして?」を言わないで、まずは子どもの気持ちにより添う。

- ⑫マイナスの言葉を、プラスに変えてみる。

(ポジティブシンキング 言霊)

- ⑬「しっかり」「きっちり」「なんで」「どうして」「いつも」「絶対」「前も・・・」は使わない。子どもの言動を引き起こした気持ちに寄り添い共感してあげる。

- ⑭楽しさ、わくわくさ等が実感できると達成感につながりやすい。やる気の誘導(わかると楽しい、知ると楽しい等)と、やりたいことを選択肢を広げてあげる。

- ・学校の先生との連携は重要

以上のように、盛り沢山で興味深い内容の講義であり、もっと聴講したいという受講者の皆さんの雰囲気を感じました。

3. グループワーク

各グループからの発表と質問に対し、前日の講義にもあった内容に加え、更に踏み込んだ内容もそれぞれのケースに当てはめて、具体的に講師から回答やアドバイスをさせていただきました。

最後に、エゴグラム
の判定結果に関して、
専門職としての適性や
気をつけるべき点を説
明していただき、分科
会を終了しました。



参加者数

1日目58名 / 2日目58名

参加者の声

- ・1日目に行われたグループでの情報交換では、かなり活発に意見が出されたと思います。その後の講師による講義では、隣席の聴講者との疑似体験などを取り入れながら、分科会のテーマである“声かけ”について、とても楽しくわかりやすく学ぶことができました。
- ・2日目の質疑応答での講師の親身なアドバイスや意見は、私たちにとってとても有意義なものであり、今後もこのような機会があれば是非参加したいです。
- ・来年も参加したいです。
- ・分科会でのグループ討議を期待して参加したが、場所の移動もあって十分な時間が無く残念でした。



担当者感想

意義のある分科会の実施を目標に、鋭意準備を重ねて当日を迎えました。意見交換が活発に行われ、1日目、2日目ともに時間が足りなくなるほど、とても盛り上がりました。

講師の講義や質疑応答は、丁寧かつ隣席の参加者との疑似体験などを交えた楽しくて非常にわかりやすいものであり、これからの児童館の現場で活かすことができる内容であったと思います。

企画委員

中道 弘美	(勝山市児童センター)
瀧本 有紀	(勝山市成器西児童教室)
吉田 縁	(勝山市村岡児童教室)
佐々木 寿代	(勝山市北郷児童教室)
齋藤 幸恵	(勝山市成器南児童教室)
大久保 美由紀	(永平寺町松岡児童館)
和田 育実	(永平寺町志比児童館)
清水 千恵美	()
田原 喜代美	(永平寺町上志比児童館)
黒川 浩徳	(永平寺町子育て支援課)

第5分科会

あそびを通して健全育成

～いろいろあるさあー あそビユツフェ～

概要

子どもたちが楽しい、もっとあそびたいという気持ちが沸き出てくるようにするために、何が大切なのか、どのような支援が必要なのかを考え、皆さんと一緒にあそびを作り出す面白さを体感しました。

講師

海道 洋子さん

(仁愛女子短期大学 非常勤講師)



海道 洋子さん

分科会内容

【1日目】

1. 講師講演

『あそびをつくる 生活をつくる』のテーマで講師、海道洋子さんからお話をいただきました。

児童館・児童クラブは、学校でもない家庭でもない第3の家として子どもたちが自由で、ありのままにいられる場所であること。自由の中にも約束を守り自分からあそびを選択したり、あそびを作り出して楽しんでいけるように、職員は子どもたちの気持ちを受け止めながらあそびの空間や環境を整えたり、子ども一人一人に適切な支援をしていくことが大切と述べられました。

2. グループワーク

あそびの提案『からだを使ってあそぼっさ！』

- (1) 8グループに分かれて、各自が道具を使わず体だけを使うあそびを考えました。
- (2) グループ内で各自、自己紹介とあそびの提案を発表しました。
- (3) 各グループで、一押しをあそびを1つ決めました。
- (4) 決定した一押しをあそびを各グループが発表しました。
- (5) 8つのあそびの提案から参加者全員で、更に一押しをあそびを1つ決めました。

- ・ダルマさんの休日
- ・ジャンケン鬼ごっこ
- ・だるまさんとあそんだ
- ・鬼ごっこ春夏秋冬
- ・言うこと一緒



やること一緒

- ・くつつき鬼
- ・手あそび パッパンパンパンキン
- ・ゾンビ鬼

★一押しは、『言うこと一緒 やること一緒』
1票差の『くつつき鬼』も決定！！

【2日目】

1. あそびを楽しもう

1日目のグループワーク『あそびの提案』で、一押し・二押しをあそびを参加者全員で楽しみました。

(1) 『言うこと一緒 やること一緒』

言う人（指示する人）を一人決め、やる人（遊ぶ人）は数人のグループに分かれて円になり手をつなぎました。

*あそびの説明では、言う人を「先生」、やる人を「子」で表現しました。

先生の指示（言うこと一緒＝言葉）、（やること一緒＝動作）

に従って、子は言葉を言いながら動作（ジャンプ）も同時に行いました。

例1：言うこと一緒 やること一緒

先生：「言うこと一緒」と言った後、

子：「言うこと一緒」と言葉を返す。

先生：「やること一緒」と言った後、

子：「やること一緒」と言葉を返す。

先生：「右」

子：「右」と言いながら右側にジャンプする。



先生：「左」

子：「左」と言いながら左側にジャンプする。

*同様に先生は「前」「後」の指示もする。

例2：先生：言うこと一緒 やること反対

「前」⇒ 子：「前」と言いながら後へジャンプする。

例3：先生：言うこと反対 やること反対

「後」⇒ 子：「前」と言いながら前へジャンプする。

例4：先生：言うこと反対 やること一緒

「右」⇒ 子：「左」と言いながら右にジャンプする。

以上のように先生は、「言うこと」と「やること」の言葉を変えていく。

(2)『くっつきおに』

鬼2名、逃げる人2名を決めました。他の人は3人ずつ横並びになり互いに腕を組みました。鬼は逃げる人を追いかけてきました。

逃げる人は、鬼から逃げながら3人グループの端（左右どちらか）にくっつきました。

くっつかれた反対側の人グループから離れて逃げる人になりました（右側であれば左側の人を逃げる人）。



逃げる人は、他のグループにくっつくまでに鬼にタッチされたら鬼を交代しました。

*鬼の人に目印をすると区別が付きやすかったです。

2. ～いろいろあるぞあそびユツフェ～

クラフトコーナーとあそびコーナーを設定し、体験していただきました。

(1)クラフトコーナー

- ・紙皿カーリング
- ・とび出せ！ロケット
- ・牛乳パックのびっくり箱
- ・CDこま
- ・アルミ虫 ・ぐるぐるタワーリング
- ・しゅりけんハンドスピナー
- ・1年カレンダー
- ・偏光板万華鏡

*制作の材料と作り方を参加者全員に配布する。



(2)あそびコーナー

- ・カロム、オニム
- ・ワーリング
- ・マンカラ
- ・ふくわらい
- ・動物、恐竜将棋



参加者数

1日目55名／2日目66名

参加者の声

- ・グループワークでのカニのくじ引きが、面白い！ドキドキしました！
- ・クラフト制作では、偏光板万華鏡の模様と色の変化に驚きました。また、紙皿カーリングがとても面白く、あそび方も工夫しだいで発展させていけると思いました。
- ・あそびのカロム、オニムコーナーでは、『やったー！オー！よし！』などの歓声が上がり盛り上がりました。
- ・あそびの提案では、参加する側と見学する側と半分に分かれたことであそびの内容がよく理解できました。明日早速やってみようと思います。
- ・パネル展示など予算が少ない中このようなアイデアを見せてもらい勉強になりました。
- ・講演やグループワークでのあそびの提案、クラフト制作など盛り沢山の内容があって楽しかったです。

担当者感想

2日間にわたっての集団あそび、クラフトや遊具を使つてのあそびなどつるつるいっぱいあそびを自ら体験することで、私たち職員はあそびの空間を整え、あそびやすい環境や雰囲気作りが心がけながらあそびの大切さを伝えていくことが大事なのだと皆様と一緒に学ぶことができました。それぞれの現場であそびの内容やあそび方など子どもたちとの関わりの中で、さらに工夫をプラスして活用していただければと思います。

企画委員

中川 利晴	(鯖江市曲木児童センター)
川西 千鶴	(鯖江市水落児童館)
山岸 純子	(鯖江市平井児童センター)
福岡 裕子	(鯖江市有定児童センター)
鈴木 優花	(鯖江市石田児童センター)
市原 実千代	(鯖江市新横江児童センター)
上野 正枝	(越前町朝日児童センター)
田邊 香織	(越前町宮崎児童館)

第6分科会

自己肯定感を高めよう

～あなたは子どもにとって意味のある大人ですか～

概要

自己肯定感とは、どのようなものか。自己肯定感が子どもの発達にどのような影響があるのか。私たちの自己肯定感を高め、子どもを育むためのヒントを見つけ、子どもの自己肯定感を育むために私たちスタッフや児童館・児童クラブでできることは何かをみんなで語り合いました。

講師

伊藤 美奈子さん

(奈良女子大学大学院 教授)



伊藤 美奈子さん

分科会内容

1. はじめに（講師より）

全国から集まったみんなとの出会い、つながりがとても大切です。この分科会で知り合ったことを成果として持って帰ってほしいです。

2. 心理臨床の現場から

自尊感情・自己肯定感は、不登校、いじめ、虐待、発達的にかたよりのある子、貧困など問題を抱えている子が低くなることが多いです。一方的な暴力・暴言を受けたり、しかられ続けると、自分は生まれなければよかったとかダメな人間だと思いつつ自分を下げていきます。抱えている問題を子どもたちの力で解決するのは大変です。

学校でも家庭でも居場所をなくした子どもがどんどん自己肯定感や自尊感情が低くなっています。どこかに居場所があったら救われます。



3. グループディスカッション①

具体的にどんな子が自己肯定感が高い、低い？

- * 高い子・・・思いやり・自己主張・愛されている・大事にされている・社会経験・失敗をひきずらない・けんかをして謝れる・自慢しない・お手伝いできる・いつも楽しそうな子・人の意見を聞ける子・こだわりがない（なんでも受け入れられる）・リーダーシップ・自分を大切に作る・輪に入れる・自分の意見が言える・あきらめない・ありがとう、ごめんなさいが自然に言える等



- * 低い子・・・声が小さい・めんどくさがる・人と比べる・人の言いなりになる・親に相手にされない等

4. 自尊感情尺度を図る

参加者の自尊感情測定尺度 A自己評価・自己受容、B関係の中での自己（関係の中での自信）、C自己主張・自己決定の3因子からなっている自己評価シートの記入を行いました。また、子どもたちの理解のため、特定の気になる子どもになったつもりで自己評価シートの記入も行いました。

5. 思春期の特徴

思春期は自己意識と他者意識が高まります。現実と根差した夢や理想が見られるようになり現実とのギャップを感じます。そのため自己肯定感は下がる傾向にありますが、自分を見つめる力や想像できる力がつくということが成長している証拠です。

6. 自己肯定感との関係要因

学校適応ができていない子は自尊感情が高いです。親に愛されている子、大事にされている子も高いです。不登校気分・イライラして落ち着かない・くよくよするなど情緒面の不安がある子は低いです。自己肯定感には周りの環境・経験によって良くも悪くもなります。自分で上げようと思っても自分では上げられません。

7. グループディスカッション②

自己肯定感を高めるにはどんな方法がある？

- * 話を聞く ゆっくりと 否定しないで最後まで喧嘩した子はお互いのケア
- * ほめる さりげなく 無意識の行動を 直接・間接的にも 存在を認める
- * 声をかける 見ているよと伝える 一人ひとりに できてるよときづかせる 自分が大事にさ

れている認識 よく見る

***環境 居場所づくり 得意なことをさせる役割**

子ども同士の関係づくり
の仕掛け ネット以外の楽
しいことを教える 社会と
リンクしたルール作り 信
頼関係



その他 たくさんの意見が出ました。

8. 自己肯定感を高めるには

みなさんが話した内容は全部大事だと思います。
無条件に愛される経験（乳幼児）、ほめられる経験
（小学生）、認められる経験（思春期）、それぞれ
積みあがっていき、感謝される（人の役に立つ）
経験が必要です。

9. グループディスカッション③

自己肯定感を高めるために児童館ができること
や職員の接し方について子どもたちが持っている
得意なこと、がんばりを披露する場をつくる

- ・やる木（木の形）を貼り、班ごとに何かいいこ
とをしたらシールをもらって貼る。（可視化）
- ・さりげなく時間をかけずに人手をかける。やら
せにならないようにさりげなくほめる。
- ・思春期のもやもやはスタッフが言葉で整理して
あげる。
- ・役割をつくる。（当番、片付け、行事の準備）子
ども会議、子ども企画、上級生のグループリー
ダー活動を行う。
- ・地域の福祉施設との交流、地域の祭りに参加す
るなど学校と連携する。便りを出して地域、保
護者へ発信する。
- ・良かったことうれしかった
ことを話す。まわりの子ど
もはどんな話でも必ず拍手
する。
- ・誕生会で保護者の名前の由来を書いてもらい発
表する。愛されている認識を感じてもらう。乳
幼児のあそびの手伝いをする。
- ・成功体験を感じられるあそびを用意してほめる。
自分ができることが新たに認識できる。
- ・いいこと、出来るようになったことなどを保護
者にその日のうちに伝える。
- ・その場で大いに具体的にほめる。みんなの前で
ほめる。名前を呼んで声掛けをする。異年齢と
交流する。



10. まとめ

児童館・児童クラブは評
価とは無関係で、学校でも
家庭でもなく、いずれとも
違う自分の顔になれます。
継続的な関わりができて、
異学年やいろんな職員と程



よい距離での交流があります。職員同士の連携に
より多面的な目でみて共有し、家庭や学校と連携
をとることが大切です。親に子どもの児童館・児
童クラブでの良い出来事をフィードバックするこ
とで親の自信回復につながり、親の自己肯定感が
上がります。スタッフも、笑顔になるために自分
の健康も大切にすること、元気に子どもたちを迎
え入れること、それが子どもにも間接的に関わっ
ていきます。どんな関わりも児童の自己肯定感の
高まりにつながっていきます。

参加者数

1日目50名／2日目52名

参加者の声

- ・評価フリーで継続的な関わりができる児童館・児
童クラブの強みを活かして一人ひとりの子どもの
色々な良さを見る目を養いたいです。またそれを
話し合える組織づくりが大切だと思いました。
- ・自己肯定感を高めるために小さなことでも積み重
ねていきたいと思います。
- ・どんな関わりも児童の自己肯定感の高まりにつな
がりますとの言葉に心がホッとしました。
- ・他の施設で取り組んでいる具体的な事例を聞いて
良かったです。他の人の意見が聞いて良かったです。
- ・自分の肯定感を知ることができました。職員の自
己肯定感もみつめていきたいと思います。

担当者感想

限られた時間の中、自己肯定感とは何か、高めて
いくにはどうすればいいのか、児童館ではどのよう
な取り組みができるのかなどグループディスカッシ
ョンを通して検討しました。自己肯定感を高めるた
めのたくさんの意見が出て、今後の児童館・児童ク
ラブでの取り組みのヒントになったと思います。児
童館・児童クラブが子どもにとっての自己肯定感を
育む場所になるよう努力していきたいと思います。全
国からの参加者の皆様と講師の伊藤先生、本当にあ
りがとうございました。

企画委員

- | | |
|--------|-----------------|
| 浅井 純一 | (越前市児童館・児童センター) |
| 若宮 博子 | (越前市神山児童館) |
| 関 理恵 | (越前市吉野児童館) |
| 田中 純子 | (越前市国高児童センター) |
| 苅部 弘美 | (越前市味真野児童センター) |
| 小出 順子 | (越前市南中山児童館) |
| 長谷川 幸世 | (越前市服間児童館) |
| 大西 のり子 | (南越前町南条児童館) |
| 木津 尚美 | (南越前町河野児童館) |

第7分科会

地域とコラボ

～児童館が地域とともに生きるためには？～

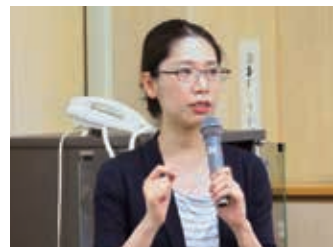
概要

地域連携について、4つのテーマを掲げた分科会担当12児童館の事例発表の後、分科会参加者によるグループ討議を行い、それぞれの児童館の抱える地域連携の問題点や今後の地域連携のあり方について話し合いました。

講師

青井 夕貴さん

(仁愛大学人間生活学部子ども教育課 准教授)



青井 夕貴さん

分科会内容

地域連携をテーマに分科会を開催するに当たり、最初に分科会を担当する12児童館の地域連携の現状と課題、問題点をまとめた事例発表を行いました。第7分科会を担当する福井県嶺南地域は6市町が東西に長く分布し、それぞれの市町に大小さまざまな児童館が点在します。それぞれの児童館の地域連携の取り組みをテーマごとにまとめ、事例発表を準備しました。



第1のテーマは、児童館で開催される季節の行事や、地域で活動されている個人、団体を児童館に招いて開催する地域連携イベントに注目した「イベントとしての地域連携」、第2のテーマは、行政より委託を受けた食生活改善推進員による食育活動など、地域の特色を生かした活動を紹介する「地域密着型児童館の取り組み」、第3のテーマは他の行政機関との併設であったり、立地的条件によって活動の活発でない児童館に焦点を当てた「小型児童館の現状と展望」、第4のテーマは、住宅地の中に立地する児童館の地域住民の方の意見から地域住民との関わりを取り上げた「地域の中の児童館として」でまとめ、

第1のテーマは、児童館で開催される季節の行事や、地域で活動されている個人、団体を児童館に招いて開催する地域連携イベントに注目した「イベントとしての地域連携」、第2のテーマは、行政より委託を受けた食生活改善推進員による食育活動など、地域の特色を生かした活動を紹介する「地域密着型児童館の取り組み」、第3のテーマは他の行政機関との併設であったり、立地的条件によって活動の活発でない児童館に焦点を当てた「小型児童館の現状と展望」、第4のテーマは、住宅地の中に立地する児童館の地域住民の方の意見から地域住民との関わりを取り上げた「地域の中の児童館として」でまとめ、

それぞれの児童館担当の企画委員が発表を行いました。

事例発表に続いてグループ討議を行うに当たり、講師よりグループ討議の進め方、討議の内容に関して、全国各地からお集まりいただいた参加者の方が児童館活動に携わる中、地域連携に関する問題点や解決法などを自由に話し合うとのアドバイスをいただきました。

グループのメンバーそれぞれが自己紹介を兼ねて、自分の携わる児童館の地域連携の現状や問題点などを出し合いました。その中から共通する課題、問題点などについて話し合いを持ってもらい、今後の取り組みのヒントやアイデアを探っていくという形で討議を行いました。



1日完結型分科会のため、1日目は4グループ、2日目は6グループに分かれてグループ討議が行われました。

北は北海道から南は九州まで全国各地からの参加者があり、それぞれの地域の特色ある地域連携の実践事例や、地域的、人材的な問題点など非常に活

発な討議が行われていました。おおむね1時間の討議時間を設けましたが、最後にグループごとに討議内容を発表するためのまとめもあり、まだまだ時間が足りていないように見受けられるグループもありました。

2日間を通しての参加者の意見として、地域の中で児童館活動を行っていくに当たって、児童館の地域住民への認知度の低さや、児童館の取組みを地域に広く認知してもらうことの重要性、情報発信のあり方の方法論、また地域の人材を児童館活動に役立ててもらふ際の人材の発見や紹介をしていただくことの難しさ、さらに古くから児童館活動に協力いただいていた人材の高齢化問題などが多く聞かれました。



最後にグループ討議の内容発表と講師による講評の時間を設けました。各グループ1人ないし2人の発表者を決めて、グループ討議の内容をまとめたものを発表しました。2時間の制限時間内での事例発表、グループ討議と各グループの内容発表と、全体的に駆け足で進行した印象がありますが、現在、第一線で児童館の運営に携わっておられる参加者の貴重な意見が集められたと思うので、分科会の成果を各児童館の地域連携の発展のために役立てていただければと考えます。



参加者数

1日目21名／2日目31名

参加者の声

- ・それぞれ地域と連携した事業は行っているが、地域の人材の高齢化が進んでいます。新たな人材の発掘、育成のために様々な方策を講じていきたいです。
- ・地域連携を進めていくためには児童館そのものの認知度をもっと高めていく必要性があります。認知度アップのためにフェイスブックの活用やチラシの配布などの活動を行っていきたいです。

担当者感想

分科会担当地域の市町間の距離が遠く、企画委員も頻繁には集まらない中、事前準備にも苦心したものの何とか分科会開催にこぎつけることができました。企画委員をはじめ、講師の先生、当日発表のスタッフ、事務局、関係者すべてに感謝します。分科会には北海道から九州まで幅広い地域から参加がありました。運営に腐心するばかりで分科会の内容にまで配慮できなかった面もありますが、少しでも児童館活動に役立てていただけたらと思います。



企画委員

伊部 悦子	(敦賀市敦賀児童館)
奥村 佳子	(敦賀市松原児童館)
岡本 紗季	(小浜市子ども未来課)
河合 美恵子	(美浜町南市児童館)
今筋 平	(若狭町福祉課)
嶋田 悠人	(高浜町第一児童館)
荒木 良徳	(福井県こども家族館)

※1日完結型として1日目、2日目ともに同じ内容で開催しました。

第8分科会

困っているな、困ったな
…保護者支援を考えよう！

概要

育児不安を抱え、こころにゆとりがなくなっている保護者へ私たちは次世代育成のためにどう支援していけばよいか。子どもに関わる人の思いや現状について話し合いました。

分科会内容

1. 分科会の流れ

(1) 1日目

[アイスブレイキング]

名前ゲーム（自己紹介）
を行い、皆さんの緊張を
ほぐしました。



[グループ討議]

自己紹介
悩みや思いを出し合いました。（模造紙、付箋
を使用する）

整理・1日目のまとめ…出てきた内容の問題点な
ど共通するところを探し整理し、その中から2日
目に話し合う課題を見つけました。

[1日目のまとめ・発表]

1日目に話し合った内容のまとめを発表しました。

(2) 2日目

[アイスブレイキング]

♪ちょっとだけ体操で体をほぐし、グループ対
抗ゲームで最後に発表する順番を決めました。

[グループ討議]

1日目の課題を深めました。

児童館・児童クラブでどういった支援ができる
か探りました。

整理・まとめ…模造紙を整理し、全国に発信し
たいキャッチフレーズを考えました。

[発表]

各グループでまとめた子どもに関わるすべての
人に伝えたいキャッチフレーズを発表しました。

2. 各グループの発表内容

金沢にちなんで加賀野
菜の名前をつけた5つの
グループに分かれて、各
グループ6～8人の人数
でグループディスカッシ
ョンをし、各グループ



『 』内のキャッチフレーズを考えまとめました。

① へた紫なすグループ

～自分を出すことができない子、ゆとりのない
子への関わり方と支援～について考えました。

「子どもの心の声に」「じっくり・ゆっくり話
を聞こう!」「受けとめよう!」

「1日、1回、1秒、良いところを見つけよ
う!」「いつも子どもがまんなか!」

ゆとりのない子ども達が健やかに育っていくために
保護者に向ける言葉(児童館・児童クラブより発信)

『受けとめよう。』

『いつも子どもがまんなか!』

② 金時草グループ

児童館・児童クラブは、保護者の方にとっても
一息つける場所である必要があるのではないかと
結論付けました。

『保護者のほっと♡』

『ステーションになろうよ!』

③ 加賀太きゅうりグループ

1つ1つにつながってい
る悩みや困った!を丁寧
に支援していくために何
が必要かを話し合った結
果、時間をかけ、畑を整
え、種をまき、丁寧に収



穫するれんこんのように児童厚生員も環境を整
え、1つ1つ丁寧な支援が必要との思いをこめ
てキャッチフレーズをつくりました。

『丁寧なれんこん支援』

④ 源助だいこんグループ

「どうしたらもっと児童館に関心を持ってもら
えるか」について話し合い、

- ・まず、児童厚生員が相手に関心を持ち、保護者に
歩み寄ります。
- ・地域・学校の行事に参加して自分が「児童厚生員」
であることを知ってもらいます。
- ・児童館とは違う子どもの様子を知ります。
- ・オープンな児童館をアピール

- ・児童厚生員も心に余裕を持ちます。
 - ・子どもを発信源に保護者とつながります。
- などの意見からキャッチフレーズを決定!!

『心 関 線 あゆみ』
にゆとり 心を持って つながる よる

⑤ 加賀つるまめグループ

(1日目のみの参加者グループ)

- 対応、支援として、
- ・児童館や児童クラブで問題が起こった場合、原因やどう対応すれば良いか子ども自身に考えさせ、子どもの力で問題解決ができるように言葉かけをします。
 - ・親や多くの人に子どもの頑張っている姿を見てもらうなど多くの目で子どもを見守ります。
 - ・遊びにおける環境整備に心がけます。
 - ・守らなければならないルールは子どもに言い続け、子どもから信頼される支援員になることが大切
 - ・地域や学校行事等に出かけ、親と共通の話題が持てる様に心がけることが大切
 - ・子どもの良いところも悪いところも保護者に伝え続け「子育てはお互いさま」の気持ちを保護者と共有し広めることが大切

『子育ては、お互いさま』

子どもの力を信じ保護者に伝え続けよう!!

⑥ 加賀つるまめグループ

(2日目のみの参加者グループ)

- 対応、支援として、
- ・その子に応じた環境を整えます。
 - ・保護者に児童クラブでの子どもの様子を見てもらいます。
 - ・親の息抜き時間を考慮してお茶に誘い、話を聴く小学校や地域など他団体と連携します。
 - ・色々な視点で子どもを見守ることで色々な子どもの姿が見えてきます。
 - ・お母さんの安心を大切に「お母さんの子育てが悪いのではない。」と伝えます。
 - ・支援員同士協力する：その子の様子を伝えあい共通認識で子どもを見守ります。
 - ・親子参加の行事などに取り組み、子どもの素敵な姿や様子など伝え、保護者が同じ悩みなど話す「しゃべり場」などを開催して子ども理解につなげます。



『子育ては一人じゃないよ!!』

参加者数

1日目37名 / 2日目38名

参加者の声

- ・全国の皆さんと同じ困りや悩みを共感できて、とても安心できたのが本音です。深く話し合えて今後、起こりうる状況を乗り越える力になるように思いました。
- ・導入からとても和やかな雰囲気良かったです。話し合いも意見を出しやすく、明日から子どもたちのため、保護者のため、そして自分がこの仕事に誇りをもって取り組んでいくための、パワーを頂けたことに感謝します。
- ・まさに悩んでいたことで、保護者と上手くいかずに失敗したところでした。皆さんからご意見を頂いて、今後につなげていきたいと思えます。



担当者感想

金沢を知っていただくため、グループ名を加賀野菜にしました。皆さん、雑談もしながら和やかに話し合っていたように感じました。2日間どこまで話し合えるか心配しましたが、グループの人数が6~8人だったこともあり、全員が自分の思いを話し合うことができました。それぞれの進行係が、1日目のまとめを2日目にしっかりつないでいくことができ、キャッチフレーズまでまとまりました。

北海道から沖縄まで全国12都道府県からの参加があり、北陸を知っていただく機会になりました。

第8分科会に参加して下さった皆さんありがとうございました。

企画委員

「TEAM 金沢」(金沢市児童館児童厚生員)

宮下 早苗、川島 紗樹、持月 ゆかり
吉井 美里、野口 俊美、三浦 啓子
東出 真粧美、山本 悠記、竹田 恭子
釜堀 美代子、広瀬 照代、松澤 栄
寺江 のりこ、中山 通子、西 よし子
宮崎 恭子、大音 恒明、小原 祥子
上野ひとみ

第9分科会

ちょっと気になるあの子について考えよう

概要

第15回大会で児童館ダイバーシティ宣言を行いました。子どもを取り巻く環境は時代とともに多様化しており、児童館としてどのように柔軟に取り組んでいくことができるのか。様々な課題の中から、今回は「LGBT」「貧困問題」「言葉や文化のちがい」に焦点をあて、いかに児童館として職員として関わっていくかをグループに分かれ事例を交えながら課題の理解を深めていきました。

分科会内容

1. 主旨説明

前回のえひめ大会で児童館ダイバーシティ宣言を行いました。子どもを取り巻く環境は時代とともに多様化しており、柔軟に対応できる児童館の特性を活かすために職員の資質と専門性を高めていこうということを確認いたしました。それを踏まえて多様性とは、多様化とは、どういうことかということでこの分科会では、「LGBT」「貧困問題」「言葉や文化のちがい」という課題に特化し皆さんとともに意見交換を行いたいと考えました。

2. グループ討議【1日目】

事前にアンケートをとり、4つにグループ分けをし、各グループにファシリテーターを配置しました。

グループごとで自己紹介を行った後、それぞれのグループに割り当てられたテ



ーマに基づいて意見交換を行いました。

「LGBT」

気になる点を上げて意見交換をしました。ソフト面：(1)子どもに対する名前の呼び方をどうすればいいのか。(2)子どもを取り巻く周囲の人の理解はどうなのか。(3)本人が性について意識を持つ時期や段階がそれぞれ異なるため対応の仕方が難しい。環境面：(1)男女に分かれているトイレの問題(2)更衣室の分け方について(3)書類などの男女の表記

この気になる子どもたちを支えてくれる人は、民生委員、大学の心理発達専門学科、スクールカウンセラー、病院の心理発達の先生ではないかという話ができました。

「貧困問題」①

育児放棄（ネグレクト、愛情不足）、コミュニケーション・性格の問題、生活保護世帯などの子どもが気になるが、それぞれがつながり合い色んな連鎖があると考えました。子どもを取り巻く環境として、学校・行政・民生委員・児童委員など切れ目のない支援でつながること、また、学校の保健の先生が情報をつかんでいるのではないかと。ネットワークを積極的に作っていき、専門機関との連携が大事だと考えました。



「貧困問題」②

子どもたちが気になるサインを出していることに気づき受け止めることができるのが児童館職員であるということ。また、つらいということ、SOSを出せない子どもに関して、なにげない会話の糸口から、こどもの話を聞く存在に児童館職員がなれるということ。そうすることで児童館職員が、心強い存在になるのではないかと。いい意味でのおせっかい、地域のつながり、関係作りが必要だと考えました。

「言葉や文化の違い」

文化の違いや教育の感覚の違いなどがあり地域や学校に馴染めない。それが原因で、言葉を発しない子どもも多い。警戒心が強く、自分の殻に籠りがちな子どもたちに、スポーツやゲームで交流をしたり、多国籍の食べ物を使ったパーティーな



どをしてお互いの理解を深めるようなきっかけづくりを試みてはどうだろうか。児童館職員としては、挨拶、声かけ、楽し

い雰囲気作りを継続的にやっていくことが大事だと考えました。

3. グループ討議【2日目】

各グループごとに1日目の振り返りを行った後、改めてその内容を発表し、それぞれの課題に対し、全体で意見交換を行いました。

「LGBT」

本人に暮らしにくさや困り感があると思われるし、こうしてほしいという思いはそれぞれ違っているので、児童館ガイドラインの「児童館の社会的責任」にも明記されているように、子ども一人ひとりの人格を尊重し、話を聞く、対応するということが児童厚生員に求められるところであると確認しました。

「貧困問題」①②

貧困対策の一環として、こども食堂や学習支援について話し合いました。設備、経費、保健所、アレルギー、偏見の目、地域の負担感など課題が多く出ましたが、実践者から実情を聞き、居場所づくりになること、地域の情報交換の場になること、時間はかかるが地域のネットワークが広がることなど、児童館で取り組む重要性を確認しました。

「言葉や文化のちがい」

様々な方法で、コミュニケーションが取れればうまくつながっていけるという話になり、その手段として、橋渡しをしてもらえる家族に頼ることや、スマホのアプリを利用すること、また、児童館の中だけで解決しようとせず、社会資源（国際協力機構、社会福祉協議会、通訳など）を活用することも必要であり、継続的につながっていくのが大切だという話になりました。



4. まとめ

児童館は、子どものあらゆる課題に直接関わることができ、関係機関に橋渡しができる特性を持っています。児童厚生員は、専門性を高めることによって偏見をなくし、さらに情報を発信していくことが大事ではないでしょうか。私たちは専門職として、子どもたちの重要な他者となって受け止め、フラッ



トな状態で変わらぬ笑顔で、対応を普遍的に行っていくということを確認しました。

参加者数

1日目34名／2日目36名

参加者の声

- ・多様な考え方があり、様々な視点から相手のことを思いやることが大切だと感じました。
- ・様々な事例を聞くことができ、明日から何をすればいいか、ヒントがたくさんもらえました。
- ・皆さんの意見や考えを聞くことで、自分の課題の整理ができ、今後の参考になりました。
- ・専門性を高め、話せる人になること、伝えていく人になることが大事だと感じました。
- ・他施設、他団体との連携の大切さを感じ、また予想外の連携できる施設・機関もあり、まだまだ広がりがあると感じました。
- ・事例が多くはなかったのですが、LGBTという新たな課題をもって帰ってさらに考えたいと思います。

担当者感想

前回大会の恩返しとして分科会を担当できましたこと有難く嬉しく思います。児童館として様々な課題にどれだけ柔軟に取り組めるか、事例の少ない中、多くのご意見をいただきました。ご協力に感謝申し上げます。

えひめ大会では「貧困問題」「妊娠期支援」と時代の流れを汲み提議しました。ふくい大会では「LGBT」「貧困問題」「言葉や文化のちがい」を取り上げましたが、回を重ね、議論を重ね、課題への理解を深め、スキルを高めていくことに意義があります。また次回、熱い議論を交わしましょう！

企画委員

「TEAM愛媛」

- | | |
|--------|-----------------|
| 小野 雅之 | (新居浜市立川東児童センター) |
| 村上 敏久 | (今治市枝堀児童館) |
| 阿部 芳久 | (今治市伯方児童館) |
| 山下 洋一郎 | (松山市北条児童センター) |
| 黒田 泰士 | (松山市久枝児童館) |
| 敷村 一元 | (えひめこどもの城) |
| 谷本 舞 | (大洲市喜多児童館) |
| 上木 秀美 | (えひめこどもの城) |

第10分科会

発達がアンバランスな子の応援団になるために

概要

一斉指示が入らない子、思い通りにならないとパニックを起こす子、友達とのトラブルが多い子はいませんか？私たち支援者が気になる子は、実は子ども自身が一番困っているのです。子どもへの適切な援助や保護者への支援についてみんなで一緒に考えましょう。ロールプレイを交えて様々な事例を紹介します。

講師

(映像による事例発表)

- ・荻野 理恵さん
(児童家庭支援センターしらゆり 副センター長 臨床心理士)
- ・西森 啓祐さん
(児童家庭支援センターしらゆり 臨床心理士)



西森 啓祐さん 荻野 理恵さん

(ビデオレター)

- ・根来 あゆみさん
(神戸学びの支援センター専門相談員、特別支援教育士SV)



根来 あゆみさん

分科会内容

支援者が気になる子どもは、実は子ども自身が一番困っています。児童館や放課後児童クラブで、よくある保護者や子どもとのやり取りを神戸のスタッフがロールプレイや事例で紹介し、子どもへの適切な援助、そして保護者への支援について、みんなと一緒に考えました。



【1日目】(ロールプレイ)

「ロールプレイ①保護者編」では、幼児が他の子に唾を吐いているが、その行動に母は謝るだけで、叱ったり、注意したりしない。唾をはかれた保護者が、これからの関係もあるので自分が言ったことは内緒で、他の方も迷惑しているので職員から注意してほしいとお願いをしている場面

「ロールプレイ②こども編」では、放課後児童クラブでのお片づけの場面で、お片づけをせずに帰る支度をする児童を「ちゃんと」「きちんと」片づける



ようにきつく指導するが、児童が職員に反抗している場面

(グループワーク)

2つのロールプレイを参加者に見ていただき、自分が選択した内容に分かれ、グループワークによりアプローチのポイントを出しあい、付箋、模造紙を用いて、グループごとに発表するという形をとりました。

どのグループも同じ悩みを共有し、応援団になるための方法を話し合い、「環境設定」「ほめる」

「ルールを決める」「関係機関との連携」等、具体的な対応が発表されました。

【2日目】(事例報告)

児童館や放課後児童クラブに在籍する発達がアンバランスで、集団での指導が困難な子どもへの関わり方を学ぶ職員研修として神戸市で実施している「児童館巡回支援の取組み」を紹介しました。



この事業の概要をパワーポイントで説明したのち、臨床心理士が児童館に出向き、助言や職員と一緒に関わり方を考え、対象の子どもへの理解を深めてい

く様子をビデオで観ていただきました。

「同じような子、うちにもいるよ」と事例の子どもと実際に関わっている子どもを重ね合わせて、ビデオを観ていた参加者の方も多かったようです。

(グループワーク)

グループワークでは、応援団になるためにどんなことがあるのかを話し合い、グループで出たたくさんの中でのキーワードを選んで発表しました。グループの発表の中では、キーワード「こころのチームプレー」として、「一人の手」を参加者一同で合唱し、こころこころでつながる連携の大切さを発表されました。困った子ではなく改めて困っている子なんだということを再認識しました。



(ビデオレター)

講師からのビデオレターでは、「困った子ではなく、困っている子どもなんだということを理解していただきたい。関係機関や学校、家庭、そして児童館で情報交換をしながら、たくさんの応援団を作ってあげることが大切。困ったことばかりでなく、いい報告も含めて情報交換をしていただきたい。明日から迎える子どもたちの応援団になれるように、『この子たちにどうしたらいいのか』『子どもたちが笑顔になれるようにどうしたらいいのか』日々考えながら、笑顔で子どもたちを出迎えてあげて、そして1人の応援団として関わってほしい」とエールを送っていただきました。

(明日からできる宣言)

最後は1人の応援団として明日からできる宣言という形で「連携とります!」「笑顔でおかえり!」「子ども、保護者、みんなのためのいい応援団になるぞ!」等、参加者一人ひとりが大きな声で宣言を出し合いました。宣言をすることにより応援団としての決意を新たにすることができたと思います。

参加者数

1日目53名/2日目55名

参加者の声

- ・色々な方との出会いからパワーを頂き、明日からまた楽しく、子どもたちと向き合っていきたいと思いました。
- ・神戸のパワーがすごく知覚動考すてきだと思い、これからの指針にしたいです。有意義な時間を過ご

せ、心も身体も喜んでいきます。この喜びを自分だけのものとせず、必ずみんなに分けていきたいです。

- ・寄り添うことの大切さ、連携の大切さ、一人ではなく、みんなで子どもの笑顔、保護者の笑顔を増やしていきたいです。
- ・どの児童館、クラブも同じような悩みを抱え解決に向けて試行錯誤しているのだと感じました。自分のクラブでも取り入れていきたいことをたくさん学んだので少しずつ取り入れていきたいです。
- ・仲間が全国にいるということが力となり、頑張れる気がします。
- ・よき応援団になれるように頑張っていきたいです。
- ・グループで意見を交換し合うことで、具体的な例や問題点に気づくことができました。

担当者感想

1日目ロールプレイでは①保護者編②こども編「児童館あるある!」実演をうなずきながら見ていただき共感できたとの多数の声を頂きました。その後、悩みや課題、疑問について活発な討議が進みました。2日目神戸の事例を「児童館巡回事業ビデオ映像視聴」後、皆のアドバイスやヒントを共有し、「応援団になるための宣言」では自分の思いを子供たちの未来に向けて新しい一歩を踏み出すことができました。「発達がアンバランスな子の応援団になるための方法」について皆で共感、共有し連携の大切さを全国の参加者と再認識できた2日間となりました。ありがとうございました。



企画委員

「TEAM神戸」

- 金坂 尚人 (六甲道児童館)
- 水野 宏明 (太山寺児童館)
- 春井 義憲 (竹の台児童館)
- 大川 晴司 (たちばな児童館)
- 田谷 久恵 (長田区社会福祉協議会)
- 中野 みゆき (原田児童館)
- 岡田 純子 (小東山児童館)
- 山本 恵 (魚崎児童館)
- 岩本 直子、太田 麻葵、平 栄美 (神戸市総合児童センター)

第11分科会

児童館・児童クラブのソーシャルワークに臨む ～1000本ノック事例版～

概要

児童館・児童クラブは、多種多様な個別援助事案において、緩やかな受け止めから継続した援助・連携の役割を担っています。「児童館・児童クラブだからできること。」を主軸に、自己の掘り起こしとミッションに挑む！

分科会内容

1. ソーシャルワークとは

本分科会は、「児童館・児童クラブだからこそできる支援とは何なのか。」を深く討論することを目的として企画しました。最初に、ソーシャルワークの基本点を振り返る復習を、次の要点に沿いながら進めました。

- ① ソーシャルワークの実施過程
- ② 意識したい3つの視点



2. 事例検討ウォーミングアップ編

いよいよ事例の登場です。「話しやすい事例」を3本提示し、グループ討議を行いました。

事例ノック1：「他の子より遅れている？」

（児童クラブ参加の幼児親子。母が他児と比較し我が子の発達を心配）

事例ノック2：「産んでよかったの？」

（産後鬱気味で精神不安定になっている母の相談事案）

事例ノック3：「お腹へった！」

（いつもお腹を空かしている児童クラブ女兒。生活課題が懸念される事案）

「母の揺らぎ、苦悩」

「少し心配な小学生」が登場する事例です。グループ討議では、以下のような意見が出ました。（抜粋）

○援助対象者の来館（所）

が途絶えぬよう「足が向きやすい環境、話すこ



とができる環境」を守りぬくことが大切

○児童館・児童クラブならではの「関係性の構築」や「身の寄せ所」を機能として備えながら緩やかな見守り手として在ることの重要性

3. 事例検討じっくり編

事例ノック4：「居場所があつてよかった」

1日目の最終ノック。

20分間のグループ討議を実施。事例は、児童館には足を運びながらも、登校を渋る女子中学生と児童館職員のトーク場面を再現。参加者の皆さんも次第に和み始め、軽やかな討議が滑り出しました。各々のグループから、様々な視点にて多様な意見が出ました。（抜粋）



○中学校との連携は不可欠だが、熟考が必要だ。

児童を傷つけてしまう可能性がある。

○「いつでもwelcome」を伝え、来館を否定しない。

○周囲の大人が、児童の「最善の利益」を共有し、重んじることが大切

○児童が、自身の今後を見通せるような援助が必要

初日は、会場の雰囲気も温まったところで終了。

終わりに、「事例ノック5」を宿題提示し、2日目へつなぎました。

（2日目）

事例ノック5：「子どものことが嫌い」

前日に宿題提示した事例を刻み込みながら、討議へと移りました。本事例は、「子どもとの生活に限界を感じる。」とメール送信してきた母親への支援を問うものでした。グループ討議では、「他機関との目線を合わせた支援」や「行政・福祉サービスのマネジメントの必要性」など、『連携』を軸にいた意見が多く出されました。

4. 悩みのキャッチボール

ここより趣向を変更し「京都スタッフの悩み」

（模擬事例）を皆さんに投げかけ、全員で意見を交し合いました。

事例ノック6：「おにぎり」

（空腹を訴える児童におにぎりを提供し続ける

児童館・児童クラブとはいかなものか。)

事例ノック7：「どっちを守る？」

(利用児童OBと小学生の間のトラブルを巡って、支援の方向性に悩む。)

この2事例では、各々の現場にて類似した事例もあるようで、熱く議論が深まりました。この2例の「悩み」を通し、「児童館・児童クラブのあるべき姿勢、執るべき支援の方向性」について様々な意見が交わされました。「自立支援を軸に」「児童の最善の利益を根底に」「連携から始める地域支援の可能性」等のキーワードを基に、私たちのミッションを考える機会となりました。



5. 児童館(クラブ)のソーシャルワークとは

最後に、本分科会のねらいであった「児童館・児童クラブだからこそできる支援とは」に議論を戻し、各グループで次のキーワードについて討議を行いました。

「児童館のソーシャルワークとは〇〇である。」

～グループ発表～

八坂 「ありのままにいられる場所」建物かもしれない。人かもしれない。それは子どもが感じる事。

清水 「子どもを中心に全世代を照らす太陽」いつも人々を照らし輝いていたい児童館である。

太秦 「電線」発電所もあれば電線もある。家庭につなぐ線でもある。スイッチつけると明るくなる機能

鞍馬 「一緒に進むこと。ひとまずゴールに向かって。」事例に関わることで共に生きていくこと。

京極 「見た目じゃない！4Dでみるスキマ産業」事情を、裏から横から縦から眺め、支援を。

賀茂 「寄り添いは七変化」寄り添いはひとつではない。多様・多機能に寄り添うことが必要

室町 「地域の全ての子どものために児童館の有する多機能性・地域性を活かして行う援助技術」

参加者数

1日目43名／2日目47名



参加者の声

- ・スピーディでテンポ良く、かつ話合いも深められとても爽りのある分科会に参加でき幸せでした！
- ・自分一人では思いつかないようなお話も聞いて、もっともっと頑張ろうという気になりました。また、児童クラブのあり方についても考えさせられました。
- ・参加して非常に醍醐味のある内容で、今も消化しきれずにいます。ふだん自分たちが当たり前に行っていることを、周囲に分かってもらうようにしているかが問われていると常々思っています。今回の分科会の未消化を少しずつ消化して、現場にフィードバックしていく作業を続けたいと思います。
- ・事例って似たようなものがあったとしても、人の関わりだから、すべて違う答えや対応になるってところが、大変であり面白くもありますね。ますますたくさんの経験とケースを重ねていきたいと思いました。

担当者感想

本分科会の企画に当たり、TEAM 京都では、企画会議を12回重ねて参りました。その経過の中で、大変深い学びや気づきを頂きました。そして、各々にとり、児童館が深く、深く「大切」になってきました。

随分悩みながら、辿り着いた分科会でしたが、参加者の皆様に、大切なキーワードをたくさん生み出していただき、まさに児童館・児童クラブの「在り方」「有り様」の掘り起こしを諮る分科会に仕上げていただきました。

TEAM 京都一同、心より感謝申し上げます。参加者の皆さん、素敵なメッセージメールを頂き、ありがとうございました。



企画委員

「TEAM 京都」

- 三浦 正人 (御室児童館)
- 池田 英郎 (塔南の園児童館)
- 山崎 真由美 (西賀茂児童館)
- 小倉 真由美 (新林児童館)
- 野田 雅子 (大宮西野山児童館)
- 谷山 和也 (京都市児童館学童連盟)
- 富田 泰行 (京都市学童保育所管理委員会)
- 高尾 順子 (大原野児童館)
- 木戸 玲子 (修徳児童館)
- 波多野 里美 (ももやま児童館)
- (当日スタッフ)
- 齊藤 美季 (さっぽろ青少年女性協会)

◆ 視察研修 ◆

Aコース 福井県恐竜博物館

恐竜化石の一大産地である勝山市に建てられた世界三大恐竜博物館の一つ



＜参加人数＞ 21名

＜内容＞ 一行を乗せたバスが勝山市に到着し、行く先に恐竜博物館の銀色のドームが見えた時には、車内に歓声が上がりました。行楽シーズンということで、駐車場は、観光バスや家族連れの乗用車でいっぱいでした。参加者は、44体に及ぶ恐竜全身骨格や大迫力の恐竜ジオラマの他、46億年の地球の歴史を物語る展示などを思い思いに楽しみました。視察後には、「ずっと来たかったので、参加できてよかった。見どころが多くて予想以上に楽しめた」「また家族連れで来たい」といった嬉しい声を耳にすることができ、夢とロマンがいっぱいの恐竜王国を満喫しました。

Bコース 福井県児童科学館（あそびの屋台会場）

年間50万人以上の来館者を数える、全国有数の科学館併設型 県立大型児童館



＜参加人数＞ 54名

＜内容＞ あそびの屋台会場への視察ということで、3コースの中で一番人気！ バス2台に分乗しての移動となりました。会場へ到着後に、「あそび」「工作」「体験ワークショップ」の各ブースにて出展者や地元の子どもたちと交流。また、参加者の半数近くの24名が会場視察を1時間行った後、国の天然記念物および名勝に指定されている「東尋坊」に向かい、日本海に面した海食崖と夕日とのコントラストの中、テレビの主人公のような雰囲気を楽しみました。

Cコース 福井県こども家族館

「海・自然・環境」に対する理解を深め、親子・家族が触れ合える福井県嶺南地方唯一の県立大型児童館



＜参加人数＞ 6名

＜内容＞ 福井県こども家族館は、小浜湾に面した美しい場所に立地しており、クッキング工房やものづくり工房といった学習施設も完備する大型児童館です。館内は、身近な道具が大きな机や椅子になった可愛らしい設備でいっぱいでした。お買い物体験ができるショッピングエリアはこどもたちで賑わっていました。本物とそっくりの食材を集めて、お買い物するのですが、お会計には本物のレジを使っているのが驚きです。そして、上の階には、船をデザインした大型遊具「こども探検号」があります。一面には、青と白のボールで満たされたプールで、こどもから大人まで大人気でした。

◆あそびの屋台◆

●日 時 11月11日(日) 13:30~15:30

●場 所 福井県児童科学館(エンゼルランドふくい)

●内 容 全国各地の児童館から「あそび」「工作」「体験ワークショップ」が大集合!!

児童館ガイドラインの趣旨をふまえた最新の遊びのプログラムを紹介しました。



～さっぽろプレゼンツ工作会～
『キラ☆ピュン↑ロジック♪』
(公益財団法人さっぽろ青少年女性活動協会
札幌市児童会館・ミニ児童会館)



おとな～るラボ
「おとみえ～る」「こえかわ～る」
(岩手県立児童館いわて子どもの森)



遊び王決定戦!
(TEAM東京)



どこでもアドベンチャー～!
生き物探しポイントラリー
(新潟県立こども自然王国)



手ざわりを楽しもう
(富山県こどもみらい館)



こちら 輪ゴム鉄砲獵友会
山賊キッズ養成所
(いしかわ子ども交流センター)



走る!うごく!話せる!紙コップ♪
(TEAM金沢)



つめつめいっぱい!紙コップタワー
(愛知県児童総合センター)



あそびの屋台ポスター



いたずらりー
(京都やんちゃーず)



でんでん太鼓
(さぬきこどもの国)

◆交流会◆

越前がにや越前おろしそば、ソースカツ丼、福井県の新ブランド米「いちほまれ」など、福井県ならではの自慢の食に舌鼓を打ちながら全国の仲間との交流を深めました。

また、山内廣志さん（第3分科会講師）による「パコーン演奏」のほか、全国の児童厚生員有志で結成された「ウクレレうかれれ隊」による演奏が行われ、大いに盛り上がりました。



◆閉会式◆

各分科会報告

分科会Ⅰ・Ⅱのまとめとして、各分科会の検討結果の報告を行いました。

第1分科会

『子どもたちの放課後の世界を広げよう！～児童館・児童クラブの連携を通して～』

第1分科会のテーマは、「子どもたちの放課後の世界を広げよう！」ということで、子どもたちの自由な時間を楽しく豊かにするために、他の児童館や児童クラブとの連携を模索しました。

各施設で行うイベントについての不安とか、各施設は毎日どんなことをしているのか、他の施設との子ども、職員との交流について、いろいろ心配されている方も多いかと思えます。それについて話し合いました。

昨日は、連携事業の取組みの現状について話し合いました。時間のない中いろんな苦労話などを皆さん発表していただき、非常に良い話し合いができました。そして、本日はおすすめプランで、ぜひこういったプランで勉強をやってみたいということで、話し合いを行ったところ、たいへん盛り上がり素晴らしいプランが出来上がりました。



第2分科会

『職員の関わりを振り返る！～マルトリートメントの視点を頼りに～』

マルトリートメント～不適切な関わり～子どもの健全な育成を妨げる関わりに対するきづきと対処などを検討しました。それは児童館・児童クラブに来所する子どもへの関わり方について、マルトリートメントにきづき・きづかせる工夫、マルトリートメントをしてしまう親への支援についてでした。

短い時間の中、児童館・児童クラブでのあるある～を再現しながら、そのマルトリートメントにきづき、その対処について話し合いました。グループワークでは非常に盛り上がり、皆さんたくさんのきづきがあるとのこと、さすが児童館・児童クラブの先生方は子どもと真摯に向き合っておられ、いろんな対処を考えておられるんだなあと改めて気付かされました。これを日々の業務に活かし、まい進していかれることと思います。

第3分科会

『五感に響け！～パコーンの魅力まるごと体験～』

『パコーン』とは!? 福井県大野市発祥の五感で楽しむ打楽器～紙管を使い簡単に作れる、自由に絵や文字を書きオリジナル作品が作れる、ものづくりを通してコミュニケーションを図れる。これがパコーンです。

“パパ～ン” (実際のパコーン音)、これから子どもたちと楽しんでいきましょう!

(以下、パコーンによる手締めの紹介)「それでは皆様お手を拝借～「いよ～っ、パピパン パピパン パピパン パン」

第4分科会

『現代の子どもとの関わり方 ～私たちにできる声かけ～』

子どもたちの関わり方で困っていることや悩んでいることで、どんな対応をしていますか？

専門職としての声掛けを検討、自分自身を知り、子どもたちの視点に立つ、子どもと関わる職員として必要なことは？

1日目はそれぞれの情報交換ということで、皆さんが困った場面を話し合いました。その後講師による「プラスの言葉、子どもたちに響く言葉、マイナスの言葉、子どもたちをさらに嫌な思いをさせる言葉」の講義を受け、最初の情報交換からマイナスの言葉をプラスにできないかという考えについて検討しました。

2日目は、講師と検討結果について質疑応答を行いました。その中で私たちが専門職として、まず結果ではなく経過をしっかりと見てあげる、子どもの表情を見てあげて学ぶことを学びました。私たち職員はお母さんでもなく隣のおばちゃんでもない。その私たちの声掛けにより、皆さん、今日学んだことを今後活かしていきたいと思えます。

第5分科会

『あそびを通して健全育成 ～いろいろあるざあーあそびユツフェ～』

子どもたちの遊びたい気持ちが湧き出すあそびの支援とは、どのようにしたらよいか、2日間話し合い、あそびの体験を通じて導いていきました。

1日目は講師による「あそびを作る、生活を作る」というテーマの講演を聞き、子どもたちが自由で、ありのままの自分でいられる場所、自由の中にも約束を守って子どもたちと話し合い、環境を作っていく。その中から子ども達が自然とあそびを見つけ楽しんでいく、職員は子ども達が自由に遊べるようにあそびの空間を整え、あそびの環境を作る役割を担っているということに、今回のテーマのヒントがあると感じました。その後グループワークに移り、「その場ですぐできるあそびを考える」というテーマで、グループ内で話し合った後全体で発表し、一番やってみたい遊びを投票、多かったものを2日目の冒頭、みんなで遊んでみることにしました。

2日目は、前日のグループワークで投票が多かったあそびを、皆で実際にやってみました。その後「あそびユツフェ」という名のとおり、企画委員が用意した多くのクラフトやゲームを、時間いっぱい、多く体験してもらいました。

2日間を通して、子どもたちの遊びたい気持ちが湧き出す支援とは、私たち職員が遊びの空間を整え、遊びやすい環境、雰囲気作りを心がけ、また、自らがあそびの体験を通じて、あそびの大切さを伝えていくことが大切だと、つるつるいっぱいのあそびの体験から、皆さんが感じとったものと思っています。

第6分科会

『自己肯定感を高めよう～あなたは子どもにとって意味のある大人ですか～』

自己肯定感とはどういうものか、自己肯定感が子どもの発達にどう影響するのか、自分自身の自己肯定感を知ることの大切さ、子どもの自己肯定感を育むために私たちができることを学びました。また講話やディスカッションを通じて、2日間皆さんと勉強しました。

1日目には自己肯定感とはそもそも何なのか、いろんな説がありますが講師の指導のもと定義を理解することができ、2日目には自己肯定感について児童館・児童クラブで注目することの意味、また、取り組みを成功するためには、どのような対応が必要かということ学ぶことができました。

この2日間を通して、児童館・児童クラブで自己肯定感に注目し、これから参加された皆さんが子どもの発達段階に応じて、より自己肯定感を高めていける支援のノウハウを、お土産に持って帰れるものと思えます。

第7分科会

『地域とコラボ！ ～児童館が地域とともに生きるためには？～』

地域連携といっても、とらえ方や取り組み方は色々あるかと思えます。

- ・イベントとしての地域連携
- ・地域密着型児童館の取り組み
- ・活動の活発でない児童館の現状と展望
- ・地域住民と児童館との関わり

これら4つのテーマについて、それぞれ分科会担当児童館の事例発表の後、地域連携に関してグループ討議を行いました。

1日完結型の分科会のため非常に限られた時間の中、参加者の皆様の地域連携に関する様々なご意見や、参考事例を集めることができました。この分科会の成果を持ち帰っていただき、各児童館の地域連携の発展のために役立てていただければ幸いです。

第8分科会（企画：TEAM金沢）

『困っているな、困ったな…保護者支援を考えよう！』

育児不安や心にゆとりのない保護者が増えている現代、保護者の気持ちを理解しながら支援を行うにはどうすればよいか、子どもに関わる人の思いや現状を議論し、すぐにできる支援を見つけ、心に響く言葉、キャッチフレーズを見つけました。それが次の6つのキャッチフレーズです。

「受け止めよういつも子どもがまんなか！」 「保護者のほっと♡ステーションになろうよ！」
「丁寧なれんこん支援」 「子育ては一人じゃないよ」
「心関線あゆみ 心にゆとり～関心を持って線つながる～あゆみよる」
「子育てはお互いさま～子どもの力を信じ保護者に伝え続けよう」
このキャッチフレーズが、少しでもこれからの皆様の活動の力になることを願っています。

第9分科会（企画：TEAM愛媛）

『ちょっと気になるあの子について考えよう』

第15回えひめ大会で児童館ダイバーシティ宣言を行いました。子どもを取り巻く環境は時代とともに多様化しています。児童館としてどのように柔軟に取り組んでいけるか、「LGBT」「貧困問題」「言葉や文化のちがひ」の3つのテーマに分けてグループ討議を行いました。すると異なるタイトルでしたが、ともに共通する3つのキーワードが出てきました。

まず1つ目は見守る他者を増やすことです。我々はあそびのプロであり、あそびを通して地域、人を巻き込んでいくことができます。また、コーディネートのプロでもあります。地域の資源を活用して見守る他者を増やしていくことができます。

2つ目はフラットです。フィルターにかけず、フラットに迎え入れる空間を作ることができます。LGBTや貧困問題、言葉や文化のちがひがあっても、フラットに迎え入れられる、そんな児童館作りを目指していきます。3つめは専門性を深めていくことです。専門職として児童厚生員・児童クラブ支援員は誇りをもって、発信する役割を担うために、今後も多種多様な事例に触れ情報を交換していきたいと思います。私自身児童館で育ってきた子どもです。今職員として働いています。誰でもフラットに迎え入れる児童館が僕は大好きです。これからも頑張っていきたいと思います。

第10分科会（企画：TEAM神戸）

『発達がアンバランスな子の応援団になるために』

支援者が気になる子どもは、実は子ども自身が一番困っています。子どもへの適切な援助、そして保護者への支援について、みんなと一緒に考えてみました。

1日目は乳幼児親子、小学生の2つのロールプレイを参加者に見てもらい、自分が選択した内容に分かれグループワークにより、アプローチのポイントを出しあい、発表する形をとりました。

2日目は神戸の取組みを紹介し、講師からのビデオメッセージ、グループワークなどで、困った子ではなく、改めて困っている子なんだという再認識をしました。最後は一人の応援団だとして、明日からできる宣言という形で、参加者一人ひとりに宣言を出しあっていただきました。

小さなことかもしれませんが、2日間を通じ明日から取り組めるヒントを得ていただいたと思っています。

第11分科会（企画：TEAM京都）

『児童館・児童クラブのソーシャルワークに臨む ～1000本ノック事例版～』

児童館・児童クラブにおける個別事案のケースは多種多様です。分科会では多様な福祉課題を抱えたケースの事例を、多くの皆さんで検討する形式で、児童館・児童クラブだからこそできること、どういった支援が必要なのかをグループで話し合いました。話合いの中では、例えば、午前中に中学生が学校に行けない、行かない子がやってきた、さあどうしますか～とのことで議論を進めました。やはり学校の支援とは違う児童館の独自性は何だろうかとの視点、ただの逃げ場になっているのでは、いやそこが居場所なのか、そこに専門性や児童館のスキルの何が必要かといった話が、たくさん出されました。その中でキーワードとして、受け止める、ただ話を聞く、つなげる、つなぎ役になる、ありのままにいられる等が出てきました。最後に、児童館のソーシャルワークとは何だというテーマでグループワークをしました。ただそこで受け止めているだけでなく、いろんなソーシャルワークの支援があること、地域にわかりにくいいため、何か良い言葉で表現したいなどのことです。「全世代を照らす太陽」や「電線」である等、いろんなワードが出てきました。

私たちが子どもや子どもの家族を含めて「一人じゃないよ」と思えるように支援をする、そこに専門性があると思います。同時に私たちが、時には一線を越えながら福祉課題に挑むことがあります。私たちが自身一人ではないのだ、皆悩みながら困った時、迷ったとき、子どもの最善の利益とは何かということを考えながら、迷いつつも実践をしているんだと感じる場になりました。引き続きいろんな話ができたらと思っています。

◆閉会式◆

全国発議

社会情勢の変化の中で、児童館は児童福祉施設として地域から期待される役割が増大しています。この地域の期待に応えるために誕生したのが、平成 23 年 3 月の「児童館ガイドライン」でした。

発出から 7 年。更に子どもを取り巻く環境が変化する中、児童館ガイドラインが今年 10 月 1 日に改正されました。これにより、私たちは誇りと自信をもって、児童館の持つ可能性を最大限に発揮できると確信しました。

特に、子どもの権利擁護を中心に据えた児童福祉法の理念は改めて新ガイドラインにおいても礎とされており、児童館が大事にしてきた「子どもの主体性」「子どもの意見表明」の重要性が語られています。今後ますます子どもたちの存在を大事にする社会の風土づくりに児童館は寄与していくことが期待されています。

また、9 月には新・放課後子ども総合プランが発表され、放課後児童クラブの量と質の向上が期待されています。

児童館・児童クラブが、全ての子どもたちの居場所として機能できるよう、職員の更なる資質向上と専門性確立を目指します。



平成 30 年 11 月 11 日

全国児童厚生員研究協議会

第 16 回全国児童館・児童クラブふくい大会参加者一同

次回開催地発表

全国児童厚生員研究協議会から次回開催地は「京都」との発表がありました。

福井県を代表して欠戸実行委員長から「福井でのつるつるいっばいのハピネスの小さな芽を、京都で花に実らせてください」とのエールとともに、ふくい大会地区リーダーの熱い寄せ書きが入った「メッセージボード」を京都代表者に贈呈しました。



◆閉会式◆

閉会挨拶



第16回全国児童館・児童クラブふくい大会実行委員会
副委員長 八 杉 藤志美

第16回全国児童館・児童クラブふくい大会の閉会に当たりまして、一言ご挨拶申し上げます。

10月に開催されました福井国体の興奮が冷めやらぬ、ここ「ふくい」の地に、全国各地から大勢の皆様が参加してくださり、ふくい大会が盛大に開催できましたことに厚くお礼申し上げます。

2日間の研究協議で十分な話し合いができたでしょうか。また、全国の仲間との交流を深めることができたでしょうか。2日間の大会の様子を見ておりますと、笑顔の中にも真剣に活発に意見交換する皆様の意気込みを感じることができました。再会を喜び合う姿や交流会で和気あいあいと話す深い絆に感動さえ覚えました。私にとっては初めての全国大会でしたが、全国各地の多様な状況や参加者の皆様の悩みや情熱を知ることができ、たいへん意義ある大会でした。福井県内からの参加者の皆様も私同様に意義深い2日間だったと思います。

福井県は、ある統計によりますと「幸福度日本一」の県です。小中学生の学力・体力はトップクラス、3世代同居の割合も高く、離婚率も低い。子育てしやすい県ですが、全国にある問題は福井にもあります。多様な子どもたちにどのように関わっていくのか、日々迷いながら悪戦苦闘しています。そのような中、この大会を福井で行えたことは、福井県の児童館、児童クラブにとって大変幸せでした。この大会で得た財産を明日からの活動に活かしていきたいと思います。

子どもの育成というものは「答えのない世界で、答えを追い求めていくようなもの」ではないでしょうか。私たちの仕事というものはそのように難しいものだと思います。

先ほど、次回大会は京都で開催することが決まりました。全国から参加して下さった皆さま方も、福井大会で得た財産を各地に持ち帰り、実践し、また、2年後に京都で会いましょう。

次回大会も、皆様方のご支援で盛大に開催され、全国の児童館・児童クラブが益々発展することを祈念いたしまして、第16回全国児童館・児童クラブふくい大会を閉会させていただきます。皆様、本当にありがとうございました。



◆写真で振り返るふくい大会◆

会議一覧

会議名	実施日	場 所	参加人員	会議名	実施日	場 所	参加人員
第1回企画委員会	H29. 6. 1	福井県児童科学館	59名	第3回企画委員会	H30. 3. 8	福井県児童科学館	55名
				第3回実行委員会			20名
第1回実行委員会	H29. 6. 7	福井県児童科学館	22名	第6回地区リーダー会議	H30. 5.15	福井県児童科学館	16名
第1回地区リーダー会議	H29.6.28	福井県児童科学館	14名	第4回企画委員会	H30. 5.23	福井県児童科学館	65名
第2回地区リーダー会議	H29.9.15	福井県児童科学館	14名	第4回実行委員会			22名
臨時地区リーダー会議	H29.9.26	福井県児童科学館	13名	第7回地区リーダー会議	H30. 6.29	福井県児童科学館	16名
第2回企画委員会			63名	事前リハーサル	H30.10.14	福井県児童科学館	90名
第2回実行委員会	H29.10. 3	福井県児童科学館	22名	第8回地区リーダー会議			18名
第3回地区リーダー会議	H29.11.17	福井県児童科学館	15名	第5回実行委員会	H30.10.18	福井県生活学習館	22名
第4回地区リーダー会議	H29.12.22	福井県児童科学館	14名	第6回実行委員会	H31. 2.21	福井県児童科学館	23名
第5回地区リーダー会議	H30.2.16	福井県児童科学館	60名	第9回地区リーダー会議			16名

❖地区分科会打合せ



❖地区リーダー会議



❖企画委員会



❖実行委員会





◆新聞掲載記事

【福井新聞】平成30年（2018年）11月11日（日）

キレる子に考える力を

福井で全国児童館大会

分科会や講演 700人情報交換

第16回全国児童館・児童クラブふくい大会（福井新聞社後援）が10日、福井市の県生活学習館で



基礎講演で客席を沸かせた笑いコンビ「バックンマクン」

活学習館で始まった。11日まで約700人が情報交換し、子どもや子育ての支援の仕方を考える。県内では初開催。全国の児童館・児童クラブの職員らが参加し、初日は11の分科会で話し合った。

子どもへの声掛けを考える分科会、スクールカウンセラーを務める県立大附属福祉学部の吉澤一准教授は「キレる子どもに話さないのは考える力」と指摘。子どもの質問にどう答えるのかを尋ねた

11日は福井市の県生活学習館を会場に、最新の遊びのプログラムを学ぶ。(岩城一彦)

り、子どものオガタイプな言葉を使わずに「おはようございます」と挨拶を返したりして、前向きなコミュニケーションに導く手法を助言した。基礎講演は、お笑いコンビ「バックンマクン」のバトリック・ハラランさんと吉田麗さんが子育てについて鮮やかなトークを繰り広げた。2児の父のハラランさんは「アメリカの子は積極的にコミュニケーションが上手。日本の子どもは最初は上手なのに、中学生になると質問が出なくなる」として、教育者として、コミュニケーションは楽しいという概念を自分の行動で示してほしい」と呼び掛けた。

児童館や児童クラブ職員…

子ども支援関係者集結



子育てについて話をするバックンマクン＝福井市の県生活学習館で

子どもや子育てへの支援のあり方を考える「第十八回全国児童館・児童クラブふくい大会（県児童館連絡協議会、児童健全育成推進財団など主催）が10日、福井市下大糸町の県生活学習館（ニューアイ）で

全国大会 バックンマクン講演

「子育て」をテーマに基調講演した。福井に二年間ほど任じたことがあるバックンは、休みの日に子どもと坂井市のエンゼルランドふくい（県児童科学館）で遊んでいたことを紹介し「福井は東京と違い、山や海に囲まれ自然の中で学べるものが多くある」と強調。マクンは「いろんな活動や遊びを小さいころから子どもにさせることで、大きく成長する」と語った。開会式では、大会実行委員会の欠戸郁子委員長が「分科会で活発な議論をして、子どもを支援する活動に役立ててくださる」とあいさつした。子どもに関わり方や遊びなど十一テーマの分科会があり、参加者は熱心に議論していた。十一日は引き続き分科会をし、エンゼルランドふくいなどの視察もある。（大健太郎）

【日刊県民福井】

平成30年（2018年）11月11日（日）

連携で放課後の豊かな体験提供



児童健全育成事業を推進するため、全国の児童館や放課後児童クラブの職員の研究協議と交流の場を設け、意識と資質の向上を図る第16回全国児童館・児童クラブふくい大会は11月10、11の両日、福井市で開かれた。11のテーマで実施された分科会の中から、児童館と児童クラブの連携について考えた分科会の内容を紹介する。

全国児童館・児童クラブふくい大会から

分科会・福井市の事例報告

放課後の自由な時間 ことも多い。子どもたちにとって 第一分科会のテーマより楽しく豊かな時間は「子どもたちの放課後の世界を広げよう」にする。そうした思いでさまざまな取り組み 児童館と児童クラブの連携の中、他の児童館や児童クラブとの連携が、遊びや活動のさらなる充実につながる

3クラブが 児童の人間関係広がる 合同運動会

和田児童クラブのあ 福井市の和田地区に は、たんぼ児童館内 のたんぼ児童会、単 独設置の和田児童ク

中学校区内の 児童館が交流 進学への期待感高め

すずらん児童館は、 同じ中学校区内にある あさがお児童館と交流 を進めている。 交流活動は年に2回 休み中に適度的な外出

児童館と児童クラブの 連携について考えた第 1分科会

が交流を持てたらいい 会。当日は児童館の自 由な活動の様子もたも ちも 参加し、チーム所属 場所を問わずに編成し て競技を進める。各館 分科会は、福井市の 児童館、放課後児童ク ラブによる事例報告と 準備し、3クラブの グループワークを中心 全職員が参加するリレ ースを実施している。

児童館を核に 地域への愛着育む 多彩な交流活動 一回目の交流は、両 館の子どもたち混合の グループをつくり、製 作体験やゲームを交 流して世界が広が ったこと▽新しい体験 から今まで見られな かった一面が出てきたこ と▽友達を助ける喜び を体感したことーを奉 げ、健全育成につな げたことも強調した。

児童館を核に 地域への愛着育む

児童館を核に 多彩な交流活動 一回目の交流は、両 館の子どもたち混合の グループをつくり、製 作体験やゲームを交 流して世界が広が ったこと▽新しい体験 から今まで見られな かった一面が出てきたこ と▽友達を助ける喜び を体感したことーを奉 げ、健全育成につな げたことも強調した。

児童館を核に 多彩な交流活動 一回目の交流は、両 館の子どもたち混合の グループをつくり、製 作体験やゲームを交 流して世界が広が ったこと▽新しい体験 から今まで見られな かった一面が出てきたこ と▽友達を助ける喜び を体感したことーを奉 げ、健全育成につな げたことも強調した。

児童館を核に 多彩な交流活動 一回目の交流は、両 館の子どもたち混合の グループをつくり、製 作体験やゲームを交 流して世界が広が ったこと▽新しい体験 から今まで見られな かった一面が出てきたこ と▽友達を助ける喜び を体感したことーを奉 げ、健全育成につな げたことも強調した。

児童館を核に 多彩な交流活動 一回目の交流は、両 館の子どもたち混合の グループをつくり、製 作体験やゲームを交 流して世界が広が ったこと▽新しい体験 から今まで見られな かった一面が出てきたこ と▽友達を助ける喜び を体感したことーを奉 げ、健全育成につな げたことも強調した。

児童館を核に 多彩な交流活動 一回目の交流は、両 館の子どもたち混合の グループをつくり、製 作体験やゲームを交 流して世界が広が ったこと▽新しい体験 から今まで見られな かった一面が出てきたこ と▽友達を助ける喜び を体感したことーを奉 げ、健全育成につな げたことも強調した。

児童館を核に 多彩な交流活動 一回目の交流は、両 館の子どもたち混合の グループをつくり、製 作体験やゲームを交 流して世界が広が ったこと▽新しい体験 から今まで見られな かった一面が出てきたこ と▽友達を助ける喜び を体感したことーを奉 げ、健全育成につな げたことも強調した。

児童館を核に 多彩な交流活動 一回目の交流は、両 館の子どもたち混合の グループをつくり、製 作体験やゲームを交 流して世界が広が ったこと▽新しい体験 から今まで見られな かった一面が出てきたこ と▽友達を助ける喜び を体感したことーを奉 げ、健全育成につな げたことも強調した。

◆実行委員・企画委員名簿◆

【実行委員会】

	役職	氏名	所属
1	委員長	欠戸 郁子	福井県児童館連絡協議会 会長（福井県児童科学館 館長）
2	副委員長	千葉 雅人	全国児童厚生員研究協議会 会長
3	副委員長	八杉藤志美	福井県児童館連絡協議会 副会長（福井市児童館連絡協議会 会長）
4	委員	阿南健太郎	一般財団法人児童健全育成推進財団 総務部長
5	委員	有賀 計子	福井県健康福祉部子ども家庭課 課長
6	委員	重森 正雄	福井県児童科学館子ども支援課 【企画委員長】
7	委員	齋藤 常夫	福井市もくせい児童館 館長 【企画委員代表（福井地区）】
8	委員	武川ひろみ	坂井市坂井木部児童館 厚生員 【企画委員代表（坂井地区）】
9	委員	幅岸 清美	大野市児童館 館長 【企画委員代表（奥越地区①）】
10	委員	中道 弘美	勝山市児童センター 総括所長 【企画委員代表（奥越地区②）】
11	委員	中川 利晴	鯖江市曲木児童センター センター長 【企画委員代表（丹南地区①）】
12	委員	浅井 純一	越前市児童館・児童センター 館長 【企画委員代表（丹南地区②）】
13	委員	荒木 良徳	福井県こども家族館 厚生員 【企画委員代表（嶺南地区）】
14	委員	前田 廣子	元大野市児童館 館長
15	監事	中島 幸子	福井県児童館連絡協議会 会員（福井県こども家族館 館長）
16	監事	木村 愛子	福井県みらい子育てネット母親クラブ連絡協議会 会長

【企画委員会】

	役職・分科会	氏名	所属
1	企画委員長	重森 正雄	福井県児童科学館子ども支援課
2	第1分科会 (福井地区)	齋藤 常夫	福井市もくせい児童館 館長
3		長谷川和子	福井市さつきじどうかん 館長
4		小林 清直	福井市とちのき児童館 館長
5		八杉藤志美	福井市くすのき児童館 館長
6		吉岡 眞代	福井市あさがお児童館 館長
7		渡邊 敦子	福井市くるみ児童館 館長
8		筆島 幸枝	福井市とまと児童館 館長
9		中村 浩美	福井市和田児童クラブ 支援員
10		南 智仁	福井市社児童クラブ
11		田村祐紀恵	福井市社会福祉協議会 担当
12		第2分科会 (坂井地区)	武川ひろみ
13	中嶋 智恵		坂井市兵庫児童館 厚生員
14	下田美穂子		坂井市池上児童館 厚生員
15	川畑久美子		坂井市城北児童館 厚生員
16	桑野 佳世		坂井市春江児童館 厚生員
17	出店 理成		坂井市子育て支援課 主事
18	第3分科会 (奥越地区①)	幅岸 清美	大野市児童館 館長
19		今井 智子	大野市西部児童センター 厚生員
20		江端亜由美	大野市西部児童センター 厚生員
21		大川貴美代	大野市南部児童センター 厚生員
22		宝居 貴子	大野市東部児童センター 厚生員
23		泉脇真由子	大野市東部児童センター 厚生員
24		高村 重美	大野市北部児童センター 厚生員
25		松田 美保	大野市和泉児童センター 厚生員

26	第4分科会 (奥越地区②)	中道 弘美	勝山市児童センター 総括所長
27		瀧本 有紀	勝山市成器西児童教室 厚生員
28		吉田 縁	勝山市村岡児童教室 厚生員
29		佐々木寿代	勝山市北郷児童教室 厚生員
30		齋藤 幸恵	勝山市成器南児童教室 厚生員
31		大久保美由紀	永平寺町松岡児童館 厚生員
32		和田 育実	永平寺町志比児童館 厚生員
33		清水千恵美	永平寺町志比児童館 厚生員
34		田原喜代美	永平寺町上志比児童館 厚生員
35		黒川 浩徳	永平寺町子育て支援課 参事
36		第5分科会 (丹南地区①)	中川 利晴
37	川西 千鶴		鯖江市水落児童館 厚生員
38	山岸 純子		鯖江市平井児童センター 厚生員
39	福岡 裕子		鯖江市有定児童センター 厚生員
40	鈴木 優花		鯖江市石田児童センター 厚生員
41	市原実千代		鯖江市柳町児童センター 厚生員
42	上野 正枝		越前町朝日児童センター センター長
43	田邊 香織		越前町宮崎児童館 館長
44	第6分科会 (丹南地区②)	浅井 純一	越前市児童館・児童センター 館長
45		若宮 博子	越前市神山児童館 厚生員
46		関 理恵	越前市吉野児童館 厚生員
47		田中 純子	越前市国高児童センター 厚生員
48		苅部 弘美	越前市味真野児童センター 厚生員
49		小出 順子	越前市南中山児童館 厚生員
50		長谷川幸世	越前市服間児童館 厚生員
51		大西のり子	南越前町南条児童館 厚生員
52		木津 尚美	南越前町河野児童館 厚生員
53	第7分科会 (嶺南地区)	荒木 良徳	福井県こども家族館 厚生員
54		伊部 悦子	敦賀市敦賀児童館 館長
55		奥村 佳子	敦賀市松原児童館 厚生員
56		岡本 紗季	小浜市子ども未来課 主事
57		河合美恵子	美浜町南市児童館 厚生員
58		嶋田 悠人	高浜町第一児童館 主事
59		今筋 平	若狭町福祉課 主事

【事務局】

	役 職	氏 名	所 属
1	事務局長	木崎 直哉	福井県児童科学館 副館長
2		高橋 茂樹	福井県児童科学館子ども支援課 課長
3		石丸 如伸	福井県児童科学館利用サービス課 課長補佐
4		杉本 千明	福井県児童科学館利用サービス課 グループリーダー
5		生水 良治	福井県児童科学館利用サービス課 児童支援員
6		村田 弘孝	福井県児童科学館子ども支援課 グループリーダー
7		河合 巧磨	福井県児童科学館子ども支援課 児童支援員
8		川口由理子	福井県児童科学館子ども支援課 児童支援員
9		高木 美咲	福井県児童科学館子ども支援課 児童支援員
10		川越あいみ	福井県児童科学館子ども支援課 児童支援員
11		松永 朋子	福井県児童科学館子ども支援課 児童支援員
12		伊藤 信智	福井県児童科学館子ども支援課 児童支援員
13		月田千栄子	福井県児童科学館子ども支援課 児童支援員
14		橘田実寿恵	福井県児童科学館子ども支援課 児童支援員

◆協賛をいただいた企業・団体◆

- ・ 上屋敷工業株式会社
- ・ 株式会社福井村田製作所
- ・ 株式会社ダイードリンコ北陸
- ・ 江崎グリコ株式会社
- ・ 清川メッキ工業株式会社
- ・ 三和電気土木工事株式会社
- ・ 有限会社タキダエンタープライズ
- ・ 株式会社ヒューマン・デザイン
- ・ 福井県民生活協同組合
- ・ 福井放送株式会社
- ・ 北陸電力株式会社福井支店
- ・ 株式会社ユアーズホテルフクイ
- ・ 株式会社アイビックス
- ・ 株式会社グリーンシェルター
- ・ 学校法人福井仁愛学園
- ・ 株式会社 P L A N T
- ・ 吉水建機株式会社
- ・ 株式会社ジャクエツ福井店
- ・ 株式会社福井眼鏡
- ・ 株式会社ホリタ
- ・ 寺岡オートドア株式会社福井営業所
- ・ 株式会社福井テレビ開発
- ・ 高井不動産株式会社
- ・ 株式会社法美社
- ・ ダイードリンコ株式会社
- ・ 小川印刷株式会社
- ・ 齊藤設備機工株式会社
- ・ 株式会社ジャパンビバレッジウエスト福井支店
- ・ 轟産業株式会社
- ・ 福井キヤノン事務機株式会社
- ・ 株式会社福井新聞社
- ・ 福井テレビジョン放送株式会社
- ・ 株式会社マインドアンドサウンドライフ
- ・ ラインズ株式会社
- ・ 株式会社 F B C アドサービス
- ・ 株式会社日本旅行福井支店
- ・ 株式会社福井新聞 P R センター
- ・ 株式会社みつばち
- ・ 有限会社谷川商会
- ・ 第一ビニール株式会社
- ・ 福井ひかりのくに社・出口書店
- ・ 株式会社高島松文堂
- ・ 株式会社福井銀行春江西出張所
- ・ 株式会社ほくつう福井支社

(順不同)



第 16 回全国児童館・児童クラブふくい大会 報告書

平成 31 年 3 月発行

【発行】第 16 回全国児童館・児童クラブふくい大会実行委員会

事務局

〒919-0475 福井県坂井市春江町東太郎丸 3 - 1

(福井県児童科学館内)

TEL : 0 7 7 6 - 5 1 - 8 0 0 0

FAX : 0 7 7 5 - 5 1 - 6 6 6 6

E-mail : kenjiren@angelland.or.jp

<http://www.fb.me/jidoufukui>

<http://www.facebook.com/jidoufukui>



つるつるいっぱい
ふくいでハピネス
～みんなでつなぐ 子どもの未来～



子ども虐待防止
オレンジリボン活動



児童厚生員の
輪を広げよう